

史料紹介 森本州平日記（六）

東京大学大学院
日本近代政治史ゼミ

はじめに

ここに紹介する森本州平日記は、一昨年刊行された『東京大学日本史学研究室紀要』第十五号（二〇一二年）掲載分の一九三〇（昭和五）年六月から八月までの日記の続きにあたる。なお本来は同年九月から十二月までの筆耕を本号でおこなうはずであったが、諸般の事情により、一九三二（昭和六）年一月から三月までの日記を先に翻刻することとした。よって、史料紹介の題名も前号「史料紹介 森本州平日記（四）」から一つ飛んで「史料紹介 森本州平日記（六）」とした。次号で「史料紹介 森本州平日記（五）」を収録したい。わかりにくい順序となったことをお詫び申し上げる。

今回翻刻にあたったのは、二〇一二年度の大学院日本近代政治史ゼミに出席していた院生のうち、山本ちひろ、国分航士、朴完、團藤充己、中西啓太、樋口真魚、池田真歩、國本裕子、志賀賢二、鈴木智行、

水上たかねの各氏であり、全体の調整と取り纏めは国分氏にお願いした。

出来上がった翻刻原稿を原本と引き比べて校正の労をお取り下さったのは、森本州平のお孫さんにあたられ、日記の現在の所有者である森本信正氏にはかならない。森本氏からはご親族などの固有名詞の読解や、製糸業関係の特殊な用語についてもご教示いただいた。ここに深くお礼申し上げる。また、前回同様、今回の筆耕にあたっては、原本のデジタルカメラ撮影など種々の便宜を与えてくださった齊藤俊江氏、伊那近代思想研究会（森本州平日記を読む会）代表の松上清志氏にもお礼申し上げます。

日記の翻刻にあたっては、漢字片仮名表記を漢字平仮名表記に改め、旧字体は原則として新字体に改め、不明文字については□で示したほか、可能な限り原文に忠実に起こした。なお、ごく一部、森本家にかかわる私的な記述、個人に関する評価にかかわる記述などについては、〔中略〕あるいは**などにより伏せ字扱いにした。

一月一日 木曜

年は不況に暮れ、無活気無反撥に明けたり。併も前途何等の光明なし。本年は自分にとりては最も有意義、最も自重すべき年なり。銀行も五、六月の候には退き、専念組合事業に没頭すべく、作興会も本年は予算を削除せらるべし。「腹力を養へ」、此一言は本年予の最大なる警告なるべし。

朝六時起き立ちて、弁天社より忠魂碑・三峯社氏神・五輪様等初詣して、大福を家内団欒して寿ぐ。小学校に於ける拝賀式に参列す。今年は参列者極めて多し。女子会・青年会・訓練所等も数多参列したり。式終つて例の通り祝盃を頂き、組合の年賀式に参列す。本年は理事全部参列し賑なり。従業員の祝盃を一巡したるに、酔廻りて龍門寺に年賀し酔い伏す。次に本所に木炭組合総会に列し、熊谷検査員来らざれば、午後四時半組合初集會に参列す。信也既に参し居り交代す。組合が危機にある等の話を聞く。帰宅して賀状を書く。

予記 腹力未だ充実せず、多忙に酔ひたる去年は、沈着なる能はざりしを思ふ。

浜口首相病床にあり。新年の議會に出ると云ふて居る。

社会の今日 年は不況無活気消沈に暮れ、其俟新年。

【語句の説明】①忠魂碑：大正四年に新井部落の軍人會員十六名の発議により、嚴島神社境内に建てられた。大正十四年から松尾村尚武會が祭事を引き継いだ

②大福：「おおぶく」と読む。元日だけの行事で、黄粉のお茶、吸物をいただく

一月二日 金曜

雪積る事五寸、年賀客チラ／＼来訪す。隣家の年賀は信也に一任して、隣・吉郎平・順太郎等年廻せしむ。終日家居して静なる新年を迎ふべく、心行くばかり新年の泰平なる気分にしたる。年賀客には病氣と称して出でず。只和男のみに会いて、彼か賀状の絵馬札をかきたる句とつり合ひて面白きを褒め話せり。赤神良讓氏より寄贈せられたる「反対表現の思想」を通読するに、皮言にて面白し。彼が禪宗僧となりたる面目躍如たり。原理日本正月号も亦通読せしも、とりとめたる処なし。多忙なる年をすごさんより悠々然たる年を送るべし。クヨ／＼する勿れとは心に鞭つ自警なり。毎朝一時間位は静坐黙想に耽るを要す。然らば心は健全なるべし。父は耕地へ金壺百円を寄附するに付話あり。賛成せり。終日家居して自らの余裕を作りたるは稀なり。予記 丘山和尚次の如に賦して贈らる。乾坤陽氣靄然新。曉日光鮮輝四隣。掩雪社頭清淨境。遠山無限白銀々。

一月三日 土曜

恵比寿開きなれば、午前六時に起床して福繩をなふ。下男久雄巧者にて、信也と共に立派なるものを数分にして作製し飾りたり。例年通り蛤の吸物にて芋汁を喫す。本年は清泉地より贈られたる芋にて其味美し。午前中詩想をねる。次の如きもの出来たり。

去年、明治神宮に倫敦条約枢密院批准諮問せられたる十月下旬上京して詣で、吾々農民の声の雪深き枢密院にまで届かざるを憂ひ、明治神宮に参籠して水垢りをとり、倫敦条約破棄せらる、様神に祈り、自ら吾等の心の天に通ずるを祈りしが、吾等の想天に通せず、空しく神に祈りて門出ですが、其時の事等思ひ添へて次の如く詠ず。うらやす

の吾敷島の国のためひそかに宇佐に袴りしものを。今はたゞ何の甲斐なし吾思ひ条約の破棄を祈りしものを。此二首を書きて、京都の友福島氏に新年の賀詞と共贈る。

午後一時より耕地初集会あり。父母招かれて列す。弁天社に公債にて金百円寄附せり。後より中島に年賀に行く。

予記 神かけて何かいのらん此雪に国の栄をたゞ一筋に。うつ高き雪ふみわけて鎮守に詣つる人のかけゆたかなり。ふる雪に比良は静けく暮れ行きてみあかし白し日枝の森かげ。大平洋波路越へ来て白妙の富士の姿をまづおがみつ。

一月四日 日曜

村田屋両家年賀訪問す。年末片桐事件に付て問はれ赧顔甚し。酒屋村田屋にては米六拾俵計り売る約束したり。価は安し。未決の儘とせり。

午後一時より銀行に重役会あり。出席の為銀行へ行く。午後三時頃より重役会始まる。其れより前重役会に提出すべき問題に付頭取と打合の要あり。報酬其他に付て打合せたり。行員の内若干名出行し居り、面会新年の祝詞を述べ。高遠支店より焼物の燈籠を贈りくれたり。岡部支店長が照明をせよとの寓意とも、高燈台の元暗し(片桐事件)とも思はる。重役会は地方の人のみにて、配当は六分其他銷却は一万五千円程度とせり。終了後、原田・金田両人を伴ひて、重役連と仙寿楼に新年宴あり。出席して夜九時頃帰宅す。子供等と共に花合せ等せり。宮沢衝平来訪す。尚夫山本へ行きしが帰宅。信也信陽舎の会合あり。出席せり。

予記 喜怒哀楽の色を顔に出さぬ様修養の必要あり。

社会の今日 近頃益々不況と人心の陰峭甚しからんとす。

一月五日 月曜

朝九時頃丘山和尚来訪す。父と三人にて酒を出して、門水先生の話等しつ、ある所へ、吉沢武夫及山下を伴ひて来訪す。其後へ秋山来訪したり。皆年酒を出したり。信也の友人原田・平栗等来り、隠居も酒を出し、話して行けり。予は午後塩沢治男方へ年賀旁々老婆の病氣見舞に訪問し、片桐氏居合せて話し、年酒を供せられて後組合本所行。

暫くの後支所に来りて、年頭の技師員会を開き、練糸上に関する打合を行ふ。夜に及びて帰る。龍門寺看認会ある由を聞きたるも欠席せり。矢沢有一より敷島一箱寄贈あり。吉沢武夫は朝日一箱(廿ヶ)持参せり。家居すれば接客多く、外出すれば諸事仕事多く、只組合の仕事等は専務及其他理事に一任して大局を握りて行く事とし、言を挿まざ黙々として大勢の流るゝに一任す。敢て自ら計画せず。黄糸の原料斤ヅメの加減にて蘭百四五十メ買入の件、工女八名解雇の件等を聞きたり。夜帰宅して年賀状等かく。

予記 北原阿智之助。神路山ほのほのあけて宇治橋もまたあとつけぬ雪の白妙。

勅題社頭雪。泰嶽。社頭三尺雪。備自絶紅台。綴玉銀千揃。乾坤日出新。

【語句の説明】①敷島：専売タバコの名の一つ。一九〇四(明治三七)〜一九四三年発売。口付きの高級タバコ

②朝日：一九〇四年、専売制実施の最初に発売された四種の巻きタバコの一つで、四種中最も安いもの

一月六日 火曜

暖にて春風吹くか如し。為に風邪にかゝるもの多し。銀行出勤す。頭取風邪なりとて欠勤し居れば事務を見る。其余暇を見て同業者及組合等を年賀廻礼す。次に、午後二時より組合に製糸部終了式と六年度開業式とありたれば、出席して戊申詔書を奉読し、一場の訓示を述べたり。本年は不況の結果製糸部委員を招かず、且又酒を廃して葉茶にて式後の和楽に代ふ。

購買組合聯合会にて予の希望を左の如く述べたり。

購連は単に米とか肥料とか他の産物を此地に売らんよりも、此土地の炭とか凍豆腐とか又は濃醬等を他に紹介〔紹介〕し、移出することを計らはれては如何。有無相通の方法をとられなば、購連の信益々増加せん。願くば此土の産物を他へ移出を計られん事を。

一月七日 水曜

暖気加はり積雪消え三月頃の暖気なり。吉沢武夫来行するから来れとの事にて、朝飯田に直行し銀行へ行く。吉沢武夫来行して其窮状を訴へ、下久堅より買入れたる繭の買入方を依頼せられる。時期悪しく（銀行へとりて）、去りとして買入しむるも利益は少なし。金田と相談の結果、此際吉沢を潰さば却て後難恐ろしとの事に、年度の代り迄後援する事にして時期を待つ事とせり。

午後聯合事務所より海野氏を訪問し、饒別し、林久太郎大工来行し其運動に来行せり。中原を訪問して年賀を述べたり。煙草朝日十箇を土産として贈る。終て午後六時より仙寿楼に於て開かれたる海野検事送別会に出席して、午後八時銀行に退き書初をなす。九時帰りて酔ひ

たれば伏す。心配事のみ多き年なり。

信也午後二時出発、清泉地へ立寄りて上京す。小松へ年玉の柿を一箱140錢贈る。

一月八日 木曜

寒気去り朝より雪降る。間瀬口より兵士出発すると聞き、見送の為集会所へ行きしが、既に出発したる後にて空しく帰る。午前十時北原阿智之助氏を訪問し、年賀旁々作興会予算の大体方針につき打合せべく訪問す。時に風邪なりとて臥床し居りたれば、暫く待ちて会ひ、作興会予算打合をなしたり。談話一時間にして去る。年玉として唐紙便箋（九十箋）を贈る。

銀行へ帰りて事務を見る。頭取風邪なりとて出行せず。伊那電より電話にて盗難株券名義書替の請求出でたる件通知し来り。直に其の手配し、金田裁判所へ行き、原田は電話を以て名川弁護士へ問合せたり。代田弁護士も招致して善後策を講ず。午後三時伊那銀行を訪問し、年賀を述べ、聯合事務所にて中原を招き、原幹事長と共に作興会予算を作る。終つて中島来飯し居り、種々話して共に夕飯を食はんと云ひたれば、仙安に招きて夕食を共にす。彼予に忠告し、銀行か組合か何れを採るべきや、組合の方も評判宜敷からず、銀行も亦全じとの事にて、組合へ何時か時を見て帰る由を告げたり。

予記 又耕地内の状況を聞き、種々話して自働車にて帰宅せり。新年早々問題多し。

一月九日 金曜

朝直に出行す。昨日よりの盗難株券取戻の件につき疑義あれば、何

とか決せざれば窃に心配なり。曾て昨年十二月中、此点に付代田弁護士説のみに信頼するは心もとなければ、東京大家の鑑定をうけては如何と頭取へ提議したるに、頭取も金田も一言の下に其必要なけんとの事にも黙したる事ありしが、本日にして予の提言は不幸にして行はざるべからざるに至り、代田弁護士を召致して種々研究をなせし結果、兎角上京し大家の鑑定をうくる事、及其手続に付差図をうける事として決したり。頭取夕刻出勤し種々話合ひしが、雨の為六時帰る。

三原屋に新年賀に行く予定なりしも、僅に頭痛を感じたれば行かず。尚父の話によりて、千田技手に山林会予算に付来訪する様話せり。組合へは行かず。

昨日今村与一郎と話したる事は予の一身上の事多く、組合長が他会社に出勤して月給取となり居る事が、一般組合員・村民の同情のなき点なりと考へたり。

発信 吉野（面会し度し）。

受信 福住吉司、女子分婉。

社会の今日 総理大臣未だ負傷愈へず、代理問題与党騒ぐ。

一月十日 土曜

組合支所に行く。朝来大風雪にて、咫尺を弁せずとは此事なるべし。風も強ければ雪も多く降る。暗くなり天地暗澹たり。風雪と共に吹き込みて戸の隙より雪積る。午前中支所に居て、椀屋の組合対勘定につき話したるも来組せず。待ちボケとなりて、午後上飯銀行出勤す。近来になき大暴風雪にてラヂオのアンテナ切れ飛ぶ。和氣子脇の下へ膨物生し、吉川医師につき切開す。

片桐事件にて盗難株取戻につきて不安愈々増す。取戻方予審判事よ

り東京へ申送り、証拠物として押収する手配せりと聴く。

一月十一日 日曜

午前中惰眠をむさぼる。併し午前十時頃出て、組合支所に行く。

又本所に転ず。塩沢治雄宅を年賀訪問せり。老婆病氣とき、病氣見舞も兼ねたり。次に本所行き専務と携へて支所に於ける従業員初会議に列し、本年の繰糸方針等につき打合をなし、帰りに銀行にて代田弁護士と共に上京し、盗難株券の返還の能不能に付有力弁護士の鑑定を仰がんとせしなり。此の説は初め盗難を発覚したる時、予は直に主張したるに金田も頭取も共に代田弁護士及名川弁護士の説を信じ、予の説を省みず、否決せられたれば予も如何とも致し難く、単に心配し居りたるのみなり。然るに日を経るに従つて取戻不可能なるもの如くなり、遂に金田も頭取も大家の鑑定をうけると云ふ。予の説に傾く様になり、初めて予が代田弁護士と上京する事になれり。

先つ名川氏を訪問し、取戻の実際の訴訟の件は名川氏によりて進ましめ、予は別に法理を大家につき訊す事にして上京す。

一月十二日 月曜

寒気凜冽万物皆凍殺せんとするが如し。東京も十年來稀なる寒気なりとて寒がり居たり。駿台荘も亦寒く朝六時半着宿して入浴し、朝食をとりて代田弁護士と今日の活動方面を研究せり。先つ名川弁護士を訪問する事とし、西銀座に名川氏事務所を訪ふ。依市氏不在にて中込弁護士に面会して盗難株券の返還如何を問ひたるも大丈夫なるべしとのみ答へたるに付、電話を以て自行株の番号を問合せ等して、中込氏と代田氏を伴ひ富士アイスクリームに昼食を喫して伊那電会社に伊原

専務を訪問す。上条信も居合せ政治談をなす。伊原氏も不況の極大に悲観論をなし居り、百十七行に就ても金田が片桐事件を報告したるを取付でも始まらなければよいと心配したりとの話なりし。

次で代田氏と分れて日本新聞社を訪問し、中谷氏を連れ出して銀座某料亭にて夕食をとりつ、銀行盗難の事及其盗難株取戻の如何を法理的に誰か大家に鑑定してもらい度く上京せりと打明したり。中谷氏も心配しくれ、然らば太田耕造氏を経て国本社中の大家に頼む方よろしかるべしとの事に其の方針を決して帰り、信也を召致して語り寝に付く。

【語句の説明】太田耕造（一八八九—一九八一）：弁護士、政治家。

平沼騏一郎の国本社で活動する。平沼内閣で内閣書記官長、鈴木貫太郎内閣で文相を務める。

一月十三日 火曜

朝代田弁護士帰宿し、共に携へて名川弁護士事務所を訪問す。幸、名川依市氏金沢より帰り居り、面会して盗難株券の帰還するや否やを問ひたるに、民法一九二、一九五条により、必ず被害者に戻るべきを言はれ、起訴も東京にて返還の訴訟を提起するより外なかるべしとの事にて、法理論的研究はなく彼の散漫なる意見を聴くのみ。代田弁護士と同一裡の人にて其の話に情味あり。人格としても面白き人にて坐談も上手なるが、法理的学究的の点にかけ居りて安心ならず。敢て追究もせず、追究すれども大丈夫なりと答ふるのみ。名川氏のオゴリによりて昼食を浜作料理店にて喫す。老政治家等来りて食事する家にて料理新鮮なるもの、みなり。他に一人の御相伴ありたり。

昼食後分れて品川鮫洲三一番地に前沢清人を訪ふ。夫妻共不在にて

空しく置手紙して帰る。帰途日本新聞社へ立寄り中谷氏に盗難の件話せしに、太田耕造氏に召会（紹介）すべしとの事に、予と旧知なれば会いて某大家の鑑定を乞はんと約し、夜帰宿直に太田耕造氏を関口台町の居に訪問す。夜中なりしも面会し其の話を尋ぬるに、彼は予の心配したる通り第三者保護なれば返還不可能なるべしとの説にて、博士堀江専一郎氏を紹介しくれ、明午後一時を期して面会すべしと紹介せらる。

大前にぬかづく今日の心もて此一年を過ごさせ玉へ（巨理博士）。

一月十四日 水曜

朝八時頃、前沢清人駿台荘に来訪したれば、午前中用事もなければ種々物語るに、彼も十年來脳病院や隔離生活の結果かは知らざれども、其の性質愚なる点あり。彼の性質上変調子出で面白からず。午前十時頃同伴して宿を出て、九段靖国神社を参拝し、三越を見て東京市内の風景の二十五六年前の学生、活時代と大に変わりたる話等して見物すれば、彼は事物に感心して一一感心せざるはなし。大声に感心して行く。三越にて昼食を喫して、丸ビル六階堀江法律事務所に午後一時堀江博士を訪問し、来意を告げ、昨夜太田耕造氏より紹介して口頭鑑定を乞ひたり、片桐事件を詳細に話して鑑定を乞ひたるに、博士は取戻困難ならんとの結論を与へられたり。

依て予は、尚詳細に互りて書面を乞ひ置きて退出し、日本新聞に行き、伊那電伊原氏に代田氏の在処を問ひたるに関島方に居り、伊那電にて代田氏に面会、訴訟提起を中止せしめて、伊原氏と名川代田両氏の法理的頭の欠を説き、伊原氏の不景氣話を聞き、丸の内会館にて伊原氏の召宴に臨み、夕食を共にして午後十時半にて代田弁護士を同伴

して帰途に付く。堀江博士と予との間の問答は銀行執務総て明記せり。日本新聞にて中谷に会い一件を話せしに、猶天野氏に頼みて見ると云ひくれたり。

一月十五日 木曜

午前八時半着飯、直に銀行出勤、金田原田両支配人を召致して上京の模様を話し、第一、名川弁護士対株式盗品の取戻し得るや否やに付き、名川氏の説は大丈夫取戻せると云ひたる件を話せしが、要するに名川氏の意見は単に粗放なる意見にて精細なる法理に非れば、余りに氏の意見のみに従て進むは考ふべき事なり。次に堀江博士の説を聞くに、決論としては取戻し困難なりと云ふにあり。占有回収の訴とするも善意の第三者に対抗出来ざれば如何とも致し難く、又白紙委任状付株式は習慣上動産と見做すを以て、是又如何とも致し難し。尚充分研究の上手紙にて通知すべし、との由を兩人及頭取に報告せり。

依て金田は片桐一点に話したるも、片桐は既に法的研究を遂げ居り、此事件に対する態度冷静にして一文も金銭上の責任を負はざるが如き態度なりとの事に、予は之れは全部銀行の務とあきらめて、他に一生面を開く事を念頭に考へたる。

次に作興会明十六日に延期となりたれば、午後一時より組合に開かれたる組合役員会に出席す。役員会は役場より農山漁村低資貸付の件につき村会より委員三人来りて、組合に此資金の世話を頼みに来り全部組合にて引受け所置せられたしとの申込あり。之に対して組合は(一)組合にて借代すべきものは組合にて引受けるべし、(二)役場に保証すれば組合にて取扱べし、との二案を出したるが、然らば借入申込者を招して談合の上ですべしと決し、会見を分れたり。次に西川

光次郎氏来組し面会す。塩沢伊一祝儀に招かれ臨席す。

一月十六日 金曜

夜来の旅行等の疲労にて朝八時迄床にありて、銀行片桐事件の成行如何、及今日開かるべき作興会予算如何等につき種々心中に画き、前者に対しては返還不可能とすれば如何にすべきか等胸中に往来す。又後者に就ては不況時に際し作興会の予算等は之を全部削除すと云ふ様な説もあり、又存置すべきものなるも斯の如きは半減すべきと云ふ説もあり。

元より自分としては経財界不況なれば人心愈々悪化し思想の善導には増々力を尽さざるべからざるにも拘らず之を削ると主張するが如きは最も不可解とする処なりとも考へられたれども、精神的の事は他の事業と異り目につくものなれば、愚者は直に之を削れと叫び、又赤化思想者は作興会を邪魔物扱として何とか機を窺て之を葬らんとするを以て此の説を新聞等へ掲載し、之に迷はされてかく論するものも少なからず。併し心ある下伊那の思想の悪傾向を憂ふるものは、之を助長して何とかして極悪不逞の思想を滅せんと試むるを以て悲観の要なけれども、万一作興会無用論等を唱ふるものあれば、四・一六事件其他を論述して、君主制度廃止を説く兇悪不逞の思想を述べて極力国民精神作興の要を説かんと肚裡既に確悟して町村長会に臨む事にせり。

午前中銀行より直に聯合事務所に行き午前中予算を呈示せしが、異論あり。第二案を呈示して笑談裡に43%を減したるものなれば可決し、之を呈出する事になり。午後三時町村長会に呈出して容易に可決せらる。

代田龍丘村長四年度決算の調査上の報告をなせり。

三原屋へ年賀に行く。

一月十七日 土曜

銀行へ出勤す。午前中聯合事務所に於て産業部会あり。出席すれば北原一郎が南佐久へ転ずる件につき会長より意見を求められ、又之に對して議論多かりしが、人事問題は会長の肚裡に待つ事としたり。尚農学校内に昨年設けたる産組講習会は県に移管出来ざりしも、今年だけは続行して移管を講ずる事。河野組合の伊那社出荷の見合せの件は其経過を聞き、伊那社にて研究せられるべしとし、猶二三の問題に付話したるも、別に左程の事もなく午前中にて終りたり。

片桐盜難事件につきましては顧問弁護士を聘して種々研究せしめたるも、初の代田弁護士の説には反したるもの多く出で、結局取戻不能の事のみ多く、肚を定めて取戻不可能なりと決心して善後策につきて講究せり。併も頭脳イマ／＼しく、彼の如きものを信用したる事等は不明の致す処にて、口惜しき事限りなし。金田支配人も業間に種々研究せしめたるも代田弁護士に対する反感も起り来り、却て此件につき弁護士の單純なる解釈が却て損を大ならしめたる等、考へれば考ふる程口惜し。

予記 頭取十二指腸癌をとる等にて飯田病院入院し居り。行員賞与分配案を持ちて出向したるに、院長代田等と会食し居りたり。

社会の今日 内にエロ、グロ等の風俗頹廢あり、外には外交の軟弱滿蒙より退却、支那より莫迦にせらる。

一月十八日 日曜

寒氣緩みたり。結氷少し。朝組合へ行かんとせしに塩沢治雄來訪し、

青年会が、松島泰雄今回竹村吾平の後を襲いて会長となりたるに付、ゴタ／＼起り新聞にも其記事出たるに付、其の内容に付て聞くに、城の青年松島に心よからず、特に松島支持者は他の多数にて其の統一困難なりとの話あり、又組合工女を松島か連れて正月上飯、料理屋にて酒飲み、芸妓をあげて工女十名計りと騒ぎたりとの話を聞く。其他訓練所指導員会が講習の件を打合せ、作興会と訓練所との間に於ける連絡に付き打合せをなす。

浜島喜代治菓子折を持參し、子息を連れ銀行へ入行さしてくれと頼まれたり。午後組合支所行。本処に行く。青山専務と總會の件につき打合せを行ひたり。竹村要人來り居り、道路潰地と地代の入換分組合へ抹消と同時に入金方の契約を行ふ。夕刻、明河原を通過し帰宅すれは、春宵にて心地よし。宮沢敏來訪す。

予記 朝六時に起きて新聞を読み、一日の事を計画すべく決す。

発信 永田大佐、奉納。

受信 永田鉄山大佐、青年協會のこと。

一月十九日 月曜

寒氣緩み薄氷あるのみ。直に銀行に出勤す。大平午後三時頃來行す。頭取が、私財を全部提供したる業務に對して勤務の怠けがちなるは面白からず。彼が常時出勤して行員を督励し、他の名譽職を放棄して専心行務を掌執せん事を望む。

午後三時頭取と入れ換りて組合本所へ来る。田中句一郎居合せ、決算の対照表及損益表出來たり。之を一覽して剰余金五千六百円計り出來たるを、分配案を大体作りて青山専務と打合せたり。組合事業も昭和五年の如き大不況の時に於ては決算面不良あるは明なるも、人心の

悪化は甚しく尖鋭し、何時如何なる事あるやも計られざる一般の状況なり。

父学務委員会あり。終つてミドリにて晚餐を喫し居りて脳貧血を起し卒倒したりとて、午後九時半頃自動車にて帰宅す。父は平常血圧高ければ常に注意を怠らざりしも、空腹へ飲酒が過ぎたる結果なるべし。敏子滞在す。***の相談として来訪したりと話あり。

予記 軽躁を戒む。力強けれ。

発信 伊原五郎兵衛、上京の礼。建国会。

社会の今日 議会近づき各政党作戦おさく怠ず。一方、議会無能の筈なり。

一月二十日 火曜

朝九時銀行出勤す。頭取、郡農会なりとて午前中来飯せず。行員賞与分配案につき研究せり。

税務署より伊藤某来行し、左の要件につき問合せあり。一、地主が土地の管理に要する費用如何。答へ。多くの費用は不要なるも、一俵に付二銭位あれば足るべし。二、小作料取立費如何。一俵に付三銭位あれば充分ならん。米穀管理費如何。一俵に付三銭もあれば充分ならん。依て以上の費用は減税の為に特に調査するものにして、別に之が基準となるものにあらず、との説明あり。

一月二十一日 水曜 晴

組合決算に付、銀行を欠動して支所を経て本所行、青山専務・吉川会計に決算事務に付き眼を通し、午後一時より開かるべき問題に付き研究せり。剰余金五、四四〇円余あり、之れか分配案其他に付考ふ。

午後一時より理事会を開設し、総会を来る三〇日午前九時より本所に開会する事、及召集議案につき協議したり。其内にて整理脱退につき、特に重要な事なれば種々研究し、軽々に整理脱退はせざる事、及整理脱退したるものに付き此後の制裁等につきても研究し、猶定額改正に付ても特に研究し、臨時総代会を召集して定額変更は之を研究する事とせり。

猶役場より依頼せられたる農山漁村低利資金に付ては、左の通り総会の意志を決して役場と交渉中なりしも纏らず、依て本塩助役を召致して話す。組合は右低利資金の内、組合に於て借替し得るものに付ては之を組合にて処理すべし、然らざるものに付ては役場にて直接取扱はれたしと申込たるに、役場にては両様の取扱は困難なれば、役場にては組合にて全部引受けて貰ひ度との事なり。依て然らば後取扱に關しては有価証券を担保として提供せられたしと申込たり。

予記 曾て村会にて農山漁村低利資金の借入の件につき話ありたるも予は欠席したるに、役場にては組合に引受けしめ、各団体に貸付け其取立方をなさしめんとしたるものなり。因て組合へ右委員来りて打合せしたるも、組合にては低利借替のみを取扱、他は役場にて保証せば取扱ふべしと返事せり。併し此低利資金を猶役場にて取扱はしむるは、自治の破壊なり。悪法と云ふべし。

社会の今日 両政党議會会休会終り本議會に移らんとし作戦中。

一月二十二日 木曜

銀行へ出勤し終日行務を見る。併も盜難株式の事脳裡にありて如何にして取戻さんかに付て苦心したり。代田弁護士に研究を囑したるも何となく不安の念去らず。

午前十時より支店長会議を開き一場の訓示をなす。次で午後一時より株主総会に出席す。頭取の説明、例のブツキラ棒に似合はず説明大にため、第一に、盗難にかゝりたる事を陳謝せり。次に、事業報告書を語りしに伊藤、橋爪等の進行係より議論出て、盗品に就損失ありたる場合は如何にすべきか等の質問、伊藤より出づ。橋爪は雑費・営業費を減少して基礎を硬くせざるべからずと論じ、其の条件を付して異議なしと述べ、之に決したり。重役会あり。賞与配分等して、終つて仙寿楼に於て宴会あり。予は伊那社の新年会にも顔を出して、大平、清水等と飲み、九時帰る。

一月二十三日 金曜

銀行出勤、盗難株式に付種々講究せしも、結局金額も大額なれば此点も考慮して金田も同伴せしむる事とし、夜行にて上京する事とし、一方、片桐岡島を使役して示談を進めしむ。兩人朝出発して金田の旨令により、越賀商店に当らしむる事とせり。一度放課後帰宅して、金田代田と共に午後八時半上京の途に付く。社会の今日 議会始まり首相代理問題にて政友つめよる。

一月二十四日 土曜

朝七時駿台荘に入る。何時も満員なりとて最下階の一室に入る。朝食して直に横田秀雄先生に電話にて面会を求む。在宅すれば来訪せられたしとの返事を得て、代田弁護士と共に中野へ行き横田氏に面会す。時に博士病床にありたるもの、如く、寝衣をままとる其上に羽織を着て出て、面会せらる。思想問題は次として法律問題を承るべく来訪せりと切り出したるに、老博士はそれは細川家の大審院の判例あるべし、

一部は勝ち一部は負けたる様記憶す、とて多くを語らず。老博士の面にも何となく病氣よろしからざる様見うけられたれば、法律問題は余り追求せずして辞去す。柿一箱手土産として持参す。

駿台荘へ帰り名川弁護士を訪問す。議会に出席すとて暫く面晤もして退出し、中込氏と法律談を試みたるも、以前よりは当方にも準備ありたればよく解する事を得たり。手続上に就ても打合をなし、弁当を供されて充分中込氏の意見を聞き、代田弁護士も研究するを得たり。終て金田と共に丸ヒル六階へ堀江弁護士を訪ひたるも不在。鈴木氏に面会したるに、以前とは反して当方に有利なる判決を示され、合理的に反対論一二を挙げ之を論破する論を挙げ、最後に常識論としても亦当方に有利なる結論を与へられたり。茲に於て、大に意を強するを得たり。

皆川巖氏を訪問し、海上ビルに野口鹿次郎を訪ひ、夕食して帰宿す。

一月二十五日 日曜

日曜なれども名川弁護士事務所へ電話を以て中込氏の出張を頼み置き朝九時出かけたなり。中込来り、(一)法律上の手続、即ち盗品返還の訴訟を本人株主より起す事。(二)押取株券を仮差押する事。片桐名義の株式は取戻困難なるを以て、何とか外に方法を講ずる事。斎藤忠□等を告訴する事等打合せて、昼食を浜作に於てとり、関島夫妻来り合したり。併して関島店に入りて、関島を頼みて示談交渉方を片桐岡島等と共に奔走する事等を頼みたり。関島快諾せられ、明十六日直に先方越賀商店に当り見るとせり。後松坂屋、松屋等に買物して再び関島店に至り、共に駿台荘に帰る。

既に片桐、岡島等来り居り、関島を引合せて交渉方依頼す。関島は

先方法律顧問三浦博士と懇意なりとの事にて尚一層意を強くし、法律的問題は如何にするとも大体は示談を以て最良の策とし、□次郎名義分は駄目としても六千円あれば、一万円位ならば示談すべきものなる事に話を進めたり。

一月二十六日 月曜

今日は定まれる要事もなし。悠々宿屋の一室に眠り、九時金田と共に上野浅草方面へ久し振りに出向す。万世橋より地下鉄道にて松阪屋に入りガマ口等買ひて出づ。浅草観音を参詣す。社殿改築中にて拝するを得ず。

三友館と云ふ喜劇場に入りて喜劇を見る。何の面白味もなし。三時間計りを空費し、午後四時金鶏学院に東方氏を訪ふ、作興会講習の内、食費其の他の費用の点につき打合せたり。昨年度と略同様なりとの東方氏の返事を聴きて一時間計り話して帰宿す。代田氏と尚此度の示談方法に関して打合せたり。午後六時半金田帰り関島氏も来りて、今日越賀へ行きたる情報を聴くに、盗品株券の取戻や否やにつき同商店の浮沈に関する重大なる件なれば、早速なわけには行かざるべしとの返事に、然らば、尚進藤方へも三人して当るべしと告げて、大体先方の意の存する処、及当方の法律的解釈を確信を得たれば、金田・代田と共に十時半夜行にて帰行す。此日は別に用事なければ金田と浅草へ行

一月二十七日 火曜

飯田町―辰野汽車中に夢みる。辰野下車すれば一面の雪郷里と、東京の寒気とに比して大差あるを見る。朝八時着飯、直に大平氏別邸に

赴き朝食の饗をうけて、金田・代田両氏来り、東京の状況を報告す。

法律的専門家の鑑定は、横田元大審院長・堀江博士共に、盗品株券の取戻しは株主より起訴せば返還し得る旨明となりたり。併も示談の方は代田氏の困難により関島卯三郎氏を依頼し、片桐・岡島両氏と越賀取引店へ交渉せしめたる纏末を報告せり。尚今一日滞京して片桐・岡島か進藤商店へ交渉せしむる事として帰りたる旨詳細に亘り報告せり。午前中銀行に居て、関島卯三郎及横田先生に礼の手紙を書きたり。午後組合本所に監事会を開きたれば立会ふべく組合に行く。青山と事務上に就て打合をなし低利資金を借入に関して役場に打合せしむ。種々屈折ありしも遂に組合を経て低資借入の事に一決し、相殺を以て組合は希望者に対する事とせり。尚石原監事来組したるも吉川氏は来組せず、以て監査を終り、例によりミドリより酒一升を買ひて、吉川順治郎・江塚佐三郎等と飲み、夜に入りて帰る。中原へ中谷著「革命亜細亜の展望」一部贈る。

予記 父大雄寺、三原屋等へ年賀に行き酔いて帰宅す。過飲の結果、身体不調なりとて臥床す。田島熊次郎より黒小紋襟巻の寄贈あり。岡部氏より白山遺稿の寄贈あり。

発信 横田秀雄。関島卯三郎。吉野福一。

社会の今日 議会にて政友首相代理其他経済問題等につめよる。

一月二十八日 水曜

正三の倅十七才男子脳膜炎にて死亡し、其の見舞に朝訪問して其の哀れなる状況を見て金拾円を贈りて慰問す。然る後銀行出勤す。金田盗難株取戻に付て百方奔走し、東京進藤商店よりも弁護士及店員来飯したる由を聞く。又信産銀行に於ては、重役会の結果不合理なる事を

論じ返還不可能なりと主張せしも、検事来行して押取し行けりとして損害は半々位にて片付くべし、との報告あり。金田百方奔走中なり。頭取農会出席欠勤せり。事務山積したるも百方の用事多くして意に任せず。

正三より頼まれたる徴兵保険払込保険料戻方に付問合せ、又前沢渡三娘死亡に付て問合せたり。又松下修一郎に対して三原屋と実行社の件につき話す。

吉野福一來訪して彼と作興会青年幹部講習会の件につき打合をなしたり。尚頭取に電話で、明、明後両日欠勤の旨届して退出せり。多忙なる一日なり。

予記 中原へ「革命亜細亜の展望」一部贈る。吉野へ「反対表現の思想」一部贈る。

発信 北原阿智之助、裁判傍聴券をたのむ。綾川中谷、青年講習会をたのむ。

一月二十九日 木曜

正三の倅十七才にて脳膜炎にて死亡し、組合を頼みて葬式すべければとて見舞に行く。午前九時頃に数人来り集ひ居り、其処へ乗り込みしに、徴兵保険をかけ置きたる由に付、五業代理店へ問合せたる返事を持ちて彼に役場へ行き、戸籍抄本、印鑑証明書等もらい来る様事つかわし、組合役員会あれば出席して後を下女に委ぬる旨を告げて去り、本所に行き信用程度表の原稿により逐条的に審理し、対人信用に於て相当の減額をなし、又対物信用に就ては80%に減額する事を提議せり。仍て組合の財産関係を充分安固なるものとなす様つとめたり。

午後三時迄かゝりて信用程度表原案を作製せり。終つて支所に来り

対電委員会に列す。吉川県議を召致して天竜水電との関係報償契約を如何にすべきかに付相談す。結局魚道溯上を以て会社と争ふも最後は金にて解決すべければ、(一) 上伊那に於ける報償に準じ発電馬力に応じて報償せしむる事、(二) 魚道の為放流する水に対して報償せしむる事、(三) 魚道設置費に対して報償せしむる事、等を打合せ、吉川を頼みて県と会社の間を交渉せしむる事にせり。

夜中咽喉痛む夢を見居たりして果せる哉、咳出る。午後は頭痛して風邪に犯されたる事明となる。夜役場にて青年刑事解決談ある筈なりしも風邪の為欠席す。尚話まとまりたる由、松島より話あり。

一月三十日 金曜

午前九時本所に於て第七回総代会を開き、年度未決算の認定等をなすべく、風邪にて頭重けれども今日こそは欠勤も出来ず、押して出勤す。午前十時半より始めたり。始め会を開きて、協議会により充分議をねり度しと提案し、賛成を得て協議会として各案全部につき協議を遂げ、猶時間あれば本会議を以て午前中に終らせんとせしも、遅れて竹村要人来り、報告書がないとか、不動産の見積がどうかぬかしで問題をこね返したるを以て休憩し昼食とし、昼食後再会したるに、一湯千里原案通り通過して直に酒宴となり、酒宴の開会の辞をなして後、直に引揚げ帰宅して床に就く。発熱三十八度五分あり。咳出づ。

一月三十一日 土曜

日当り濃く照し無風にて小春日和なり。流行感冒の為呻吟す。痛頭し発熱三十八度なり。発熱高きに非らざりしも、昨日来組して組合総代会に臨みたれば五体疲労してウトウトと眠るのみ。安眠休養。新聞を

読むも饅く粥を食し梅湯を喫しては眠る。
社会の今日 貴衆両院共、倫敦条約、予算欠陥等討論白兵戦。

二月一日 日曜

新聞を読み好きな仏書等取出して読む。断片的に面白き所のみ見る。咳出て啖之に伴ひ熱は下降して殆んど平熱になりたれども声かれたり。今日は聯合事務所て将校会あり、又作興会主催の青年幹部講習会夜行にて出発する筈に付見送り、且又一場の訓示すべく予定し居りしも、起き上れば身体フラ／＼て定らず頭腦も未だ明晰ならざれば引籠りて、電話にて下田に其旨通告せるのみ。

東岑禪師の無尽燈論を出して見るに新味加はる。蘇峯会誌第二集は通読すれども快よし。蘇峯先生は現代の山陽にて其文章報国範とすべし。明治大正昭和を通しての文豪、先生の右に出ずるものなかるべし。正午頃より雪降り出し、降る事三四寸、竹折れそうなれば、尚夫をして敷に入り雪を払ひ落さしむ。

夜目冴へて眠り難く起き出で、静坐一炷したり。一昨年以來負荷せる公案につき拈提す。

村青年会総会等ありたるも風邪の為欠席す。

【語句の説明】①東岑禪師：東嶺円慈（一七二一—一九二二）。江戸中期、臨濟宗妙心寺派の僧

②拈提：仏語。禅宗で古則、公案を学人に示すこと

二月二日 月曜

暖気加り結水を見ず。凍豆腐屋の原料腐敗すと聴く。

作興会青年幹部講習会出席、金鷄学院にて五日間修業に来るも、予

は風邪の為上京も出来ず下田と吉野両氏にまかせたり。心竊に心配し、彼等か如何に受講しつ、あるかを心配せり。

熱三十八度三分あり頭重し。

仏書等取り出して読む。

二月三日 火曜

午前十時銀行に出勤せんとあせりしも、未だ充分風邪恢復せず、足フラ／＼すれば、猶太郎宅にて電話をかけて片桐事件の模様を金田より聴取して帰り床に入る。

二月四日 水曜

結凍せず、凍豆腐製造業者は皆苦心慘澹たり。腐敗せしめたるもの多数ありと云ふ。銀行出勤す。午後三時本所に回りに役員会に出席して後、夜に入りて帰宅す。咳出て啖も伴ひて出づ。未だ充分風邪の気味絶へず。

二月五日 木曜

議会、幣原首相代理の失言問題より予算総会流会となり、喧々囂々議事を進むる事能はず。民、政兩派睨み合の儘なり。立憲党派政事の断末場の悲哀なるべし。幣原首相代理は支那滿蒙に於ける退嬰的外交の執行者にして、倫敦条約の国防危機の条約締結の責任者なり。彼を責むるに日本国民として鞭をゆるむべからず。

銀行へ出勤す。山本父来訪して二三言話したるも、父は余り多くを話さず、逃げる様にして銀行より退出せり。

春日賢一氏に作興特別号を贈る。

片桐事件に主脳力を引かされし店頭の問題及人事移〔異〕動等の件につきては未だ手をふるゝを得ず。〔中略〕上柳緑来訪せりと、* * * 来訪し家政整理の件につき太田時次郎を加へたる事に付話ありし由。

本所役員会、午後二時来たりて出席し、夜龍門寺親睦会に出席し、陽松軒来信不可能（病気の為）に付協議す。

発信 春日賢一、作興贈る。

受信 北原小石。下田文一。加納金三郎。

【語句の説明】幣原首相代理の失言問題：ロンドン海軍軍縮条約をめぐり、幣原喜重郎首相代理が答弁の中で天皇の承認（樞密院における批准）を理由に正当性を主張した問題。野党からは天皇に責任を帰するものなどの批判が起こり、議場は混乱し、流会となった

二月六日 金曜

銀行に出勤す。金田起訴の盗難品取戻事件にて東奔西走して委任状を蒐集す。店頭は閑散なるも此の盗難品の取戻訴訟明とならざれば如何ともなす能はず、常に此問題のみに没頭せり。代田弁護士を招して起訴を東京にするか飯田にするかに付て研究し、飯田にする事に決したり。午後聯合事務所にて下田を訪いたるも帰飯せず。

二月七日 土曜

組合支所に行く。青山と江塚と田中と来り合して、増沢商店より手代降旗来組して増沢の機械売込の談あり。依て種々増沢の話聞きて察するに、新練系機は各地より注文殺倒し注文に応じきれざるが如き状況なれば、組合製系の如き決断よろしからざる処は強いて御勧めせず

と云ふが如き態度なれば、交渉の結果一台250円の処二十円割引し、枠を二通りつけ動力も設置する事とし六十台を三月一配に据付終る事を交渉せり。

併して如何にして支所へ据付くべきかの方法論に対しては兎角、一ノ瀬、田中の両理事を説得すれば他の理事は之に服せん、其の方法等講究するに至らずして、光沢氏より電話にて部会を開くべければ午前中に聯合事務所へ来れ、との事に正午上飯、直に部会役員会に出席す。後総会ありて平野氏の旅費二等を三等へ部会のみが訂正するは面白からずとの意見に対して原案賛成をなし、後より原貞大に怒る。

銀行に出勤して片桐事件盗難品株式の件につき、信産より萩元常務金田の訪問に対して来行し両者の意見を戦はず。当行の意見。法律上より論ずれば取戻可能なるも、同業者間に於て法律のみより論じて取戻は面白からず付示談し度し。東株新旧二十にて千円迄は出金すべし。之に對し信産は、法律上にあらずして損失を折半して負担せられしと論じ、其間に開ありて物分れとなる。

塩沢治雄老婆死亡し、葬式あり、告別式あり。朝弔問して会葬を断る。

社会の今日 衆議院幣原失言問題にて紛糾し如何ともならず。

二月八日 日曜

朝床中に居て点灸す。室内を掃除して後午前九時出づ。組合支所に入りて江塚、青山を呼び寄せて増沢式器械を据付けるに付ては其の決心如何と問ひ正し、本所に据付くべきか支所に据付くべきかに付話せしに、支所第一号工場を適当と認むとの事に、然らば理事中異論者を説服してかゝるべしと田中句一郎を電話にて呼出し、午後本所にて会

見を約す。

青山、江塚両氏は決定し、他の理事一ノ瀬を説服すべしと。此両人を説服すれば他は佐々木、熊谷の両氏は元来工場統一等の頭はなきを以て御し難きも、止むを得ず大勢に順応せしむべし、とて午前中江塚、青山の兩人と如何にして実現すべきかに付協議したり。午後田中勇太郎老母八十七才にて先月下旬没したるも不在なりし故、父の名義にて香典一円を包み弔問す。

本所に行く。浦野倉吉来訪して、元彼より担保流なりて組合所有となりし土地を買入たき希望あり、依て台帳面の評価を以て売却せんと答へしに、彼は時価を以てせられたしと云ひて逃げたり。田中句一郎を招きて支所へ六十台据付の話をなせしに、彼は工場統一の意味ならば異議なしと世話なく承服したり。此に勢を得て一ノ瀬を招して話せしに、緯線器六〇台の据付は何れにても可なるも、工場統一に付ては異論あり、との事なれば異論を如何にして統一せんかと種々研究して分れたり。

発信 北原小石、嫁の出来た祝。下田文一、勝男就職。

二月九日 月曜

銀行へ出勤す。聯合事務所へ電話にて模範定款借入方交渉す。金田をして東京盗品差入たる仲買店と交渉せしめ、若し示談とならば示談し、若し法律に依て解決すべきものは法律上によりて解決すべく、先づ瀬踏として金田を送りしが、示談の交渉出来そうなりとの電話ありたり。信産BKとの交渉は当行より金千円を出して示談せんと申し出たるも、信産の方は聞き入れず、去りとして交渉断絶にてもなく分れ保留しあり。組合の用件及銀行の話交々来り繁に堪へず、咳出て啖之に

伴ひ午後は薄頭痛す。

小学校にて宏回蟲駆除をなす。一掃駆除。社会の今日 失言問題解決。

二月十日 火曜

雪積ること五寸余、近來の大雪なり。銀行へ出勤し青山と打合せて役員会を横浜より帰らる上開く事を約す。

銀行にて事務を見て午後三時暇を得て八幡鳥清に行く。漁業組合対電委員会あり。天龍水電と如何に交渉すべきやに付き講究す。吉川県議も来り種々対策をねる。会するもの田中、木下真平、福島、村沢、江塚と予なり。対策の三案を得て会社との交渉の端緒を吉川を介して開かしめたり。又対策としては予の主唱により水利権許可条件の一つなる。(一) 会社は完全なる魚梯を築造し魚類の溯上下を自由ならしむる事、(二) 会社は魚の溯上下に必要な水量、即ち二割を常時放流すること、(三) 以上の施設によるも尚魚類の溯上下に支障を生ずる時は之を賠償すること、の三案を以て会社に望み決して譲歩せざることを、最後に中介者吉川をして仲裁案を出さしめて之によりて結をとけること。上伊那と天龍水電と県と三者の契約を秘密書類を見たり。午後八時半迄話して帰る。

結局会社をして相当の賠償をなさしむること、及組合内の團結を強固にすべく一生懸命奔走すべく、惣代会を開き経過を報告し、併せて団体を強からしむべくつとむる事等相談せり。

二月十一日 水曜

紀元節なれば赤飯を焚きて建国を内祝す。小学校に拝賀式ありたる

も、午後一時聯合事務所に建国祭あればとて欠席す。午前中家内樂団裡に過す。

午後一時より聯合事務所に作興会建国祭ありたれば出席すべく午前十一時出かけたなり。聯合事務所建国祭は、署長及中学先生・生徒数人來りたるのみにて、誠に淋寒なるものなり。建国祭は小笠原神官及其他二人の祭官により行はれ、予は建国頌を郎読し玉串を捧けて式を終へたり。午後三時終了す。中学生失笑したれば一喝を与ふ。此祭により明年は建国祭を各支部に任して本部にては催さざる事と決心せり。

吉野と東京行青年講習の状況等につき報告をうく。其の東京見物を主とする青年多きは面白からざりしとの話ありたり。猶文部省主催の講習に付て講習生を多く出す事等も打合せ置けり。終つて吉野と二人にて猶興社の件及東京中谷、綾川氏等が吾等の猶興社につき如何なる心地を有するか等につき話し、「勤労日本」を猶興社同人中に出す。

予記 漁業組合の記者招待会仙寿楼にあり、出席して漸くの後中坐す。田中、木下、村沢、福島、葉山と予か出席しとりもつ。代田弁護士と明日午前九時二八分飯田発上京打合す。

軍人会班より忠魂碑の原字、福島孝一が彼是云ふから相談に來れと話あり。

【語句の説明】 忠魂碑の原字：忠魂碑の文字は福島安正陸軍大将によつて書かれた

二月十二日 木曜

頭取の心添にて昼行にて上京することとなり、午前九時廿八分發代田弁護士と上京す。辰野支店に立寄り整理が如何に進み居るやを見て後、トンネルの山間をゴロ、と汽車で旅す。午後八時着京、駿台荘に

入り金田に面会し、彼の報告をうけて明日の方途を講ず。示談は金田と関島が之に当り、法律事務には弁護士に依頼し一番を始むることとせり。

二月十三日 金曜

朝駿台荘の最下の一室にて金田、代田と片桐事件につき訴訟と示談とに付彼是相談せり。併して金田か数日前より上京し、久保田（小山）、進藤（大橋）、越賀（三浦）等へ交渉したる状況に付金田より報告あり。近藤は片桐名義の株二、三〇〇円時価あるを以て何とかして示談を進め、三千円迄は切り出して示談せんと決心したるも、総て示談に應ぜざるも、の如く、小山、大橋両弁護士は未だ法理の研究充分とは云ひ難きも、三浦弁護士は一、二審共越賀被告の敗となるも大審院の判決を覆すとリキミ居ると聞き、三浦博士の老獪なる説明及吸引的魅力に付き金田の説明あり。

倒底一、二回の交渉にては示談は出来ざるものと思へども、示談は其の方法を進め行き、訴訟は名川氏につき進捗することとし、名川氏を三人にて訪問し訴状を作製すべく依頼し一五〇〇円を渡す。

予は代田氏に頼みて横浜に行き、青山、田中と、かどや旅館に會し、午後二時生糸検査所を見物し、神栄会社を訪問し、小菅に招かれて原輸出店を訪問し、片山氏に面會し生糸の卸状況を話し売込を依頼して夕食を招かれて食し、午後十時東京に帰る。青山、田中は、かどや宿り。雪降り駅の中にも積る。

予の質問要領。

- 一、優良生糸は売れるか。
- 一、器械多条生糸は如何。

一、第三者検査と今後の取引は如何。
一、生糸取引の将来如何。

二月十四日 土曜

昨夜来の雪にて東京にては交通杜絶し、市内電車徐行し、自動車縦横に走る。雪積る事五寸、七、八年来の大雪なり。朝代田、金田と打合をなし名川弁護士を訪問したるに弟名川氏居合せて、片桐事件訴状の訂正を頼み、何時にても提出する様頼み置きたり。其内同行株式は別とし、片倉紡績の行方不明のものに対しても亦別訴訟として之を考究することし、大部分のものに付久保田、進藤、越賀の三商店を相手として争ふ事とせり。

午後横浜に行く。青山、田中共に湧川商店を経て三井に至り、グラントホテルに居る事を湧川商店にて聞く。三井を訪ねて青山、田中と一所になり吉田初治郎氏を通して新井金三郎氏の検査の説を聴き、新居氏をよく研究せるに敬服す。後、宿へ帰りて田中句一郎は工場の統一、機械繰糸の一日も悠がせにすべからざるを説き、他の理事を上浜せしめて見聞を広くするの要を説けり。予の計画適中せり。東京に帰り田中と駿台荘に入る。青山は俸の所へ行く。

帰りたる後代田、金田は夜行帰途に付き、予は明一日滞京することとす。

予記 吉田氏との面会に於て第三者検査は如何、優良糸は売れるや如何、器械多条繰糸は如何、等の質問によりて、多条繰の有利なる事の回答を得たり。

二月十五日 日曜

朝八時半、信也駿台荘へ来訪す。中原、市瀬等来り話す。前沢織家前日電話にて話したりしが来訪し、彼の快活なる話をなす。二十三、五年振りにて彼に面会す。共にドンブリ飯を食して午後散す。信也を伴ひ松阪屋を見物し、増恵及母の茶碗を買ひて帰る。次に三越を見物したるも、僅に靴下止を買ひたるのみにて何の買物もせずして帰宿し、夜行十時にて新宿に出て市中の夜景を見物して帰途に付く。終日ノンキなる東京滞在なりし。信也も終日連れ歩きたるも別に飲食せしめず。

二月十六日 月曜

朝八時飯田着、直に銀行に入る。片桐事件に付其の結果如何になり行くやは大なる問題にて、常に脳裡を往来す。風邪の余後咳痰共に出て、別に身体には異状なき如きも息苦し。之れ肺に故障ある為ならん。終日行務を掌執し、後藤大助整理問題に付熊谷、福岡等其の間に入りて銀行との間に訴訟始まりたれば、之を如何にすべきか等につきても金田と共に研究せり。中村新八に関する件につきては瞞訴となりたり。数日間不在なりし故問題山積し居り多忙なり。午後一時より村農会あり出席方を頼まれしも、種々の要件あれば欠席する事とす。

集会所建築の下相談にて彼是し居れり。其の建築費は千二、三百円にて出来ることし。青年の積立金より五百円、耕地の金を五百円計り出して、新には寄附金等募集せざる事とせり。併も予には前に話なし。故に予も亦之に対して無関心なり。帰宅すれば秋葉講なりとて近隣の者集まり来り、代参の籤等ひく、猪佐雄露骨なる哀傷論を酒に酔ひてなしたるを聞き流す。

二月十七日 火曜

朝九時組合へ出勤す。支所にて江塚と種々打合をなし、聯合事務所にて下田に文部省主催思想講習会に付、講習生の宿舍割、講師の宿舍割、其他講習に付県社会課及文部省官吏に便宜を与ふる様注意すべく立寄りたり。文部省よりは南雲氏来り準備せり。予は蕉梧堂へ南雲を尋ね諸事打合て午後銀行出勤す。文部省講習は曾て水野〔常吉〕社会教育官来飯の節、国庫補助を申請したるに對し、殊に飯田にて講習を催す事となりたり。

次て銀行にては午後五時知事来飯すれば、桜町駅に出席したり。併して蕉梧堂に入りて綿貫講師と話す。作興会の設立より今日に至る間の経過、及下伊那に於ける思想運動に付て一通り説明を試みたり。併して最後に氏は予に問ふて曰く、「思想を中正にし、国民精神を作興するには何が必要と思はるゝか」との問に對し、予は次の如く答へた。「指導原理が必要である」。然らば其指導原理は何に求めるか。予は日本精神によるより外なし、外国模倣は宜敷からず、と答へ、然らば何より其指導原理を持たるゝか、曰く日本主義であると答ふ。

綿貫氏、知事に面会すべく去りたるを以て、予は別室に去り、仙安に於て大平、吉川、原、小西、小山、署長、主幹等と歓迎会の宴を開き其席に列し、午後九時帰宅。才〔裁〕判所に金田と共に行き、赤松判事の後藤と熊谷、福岡等との訴訟事件示談案につき銀行の案を示して示談す、む。併し竹村が背後に居りて癢に障りたり。

【語句の説明】①綿貫講師：綿貫哲雄、社会学者。東京文理大学教授。著作に、エル・フォン・スタイン著、綿貫哲雄訳『仏蘭西革命史論』（興亡史論刊行会、一九一八年）、『維新と革命』全三卷（大明堂、一九七三年〜七四年）がある。

②知事：長野県知事鈴木信太郎

二月十八日 水曜

聯合事務所に於て文部省主催の思想問題講習があるので、朝九時に出席した。吉川県議、大平、北原等も知事の手前出席した。此講習は予て文部省社会教育官水野常吉氏が来飯の節運動して置いた為、長野県中に於ても特に飯田に開いてくれたものであり、作興会の力によるものであり、予の力によつたものである。知事は開会の辞を文部大臣に代つて述べた。其の開会辞の要旨は「日本の現状は思想、経済、其他種々の点に於て重大なる時期であるが、併も万事の根本たる思想は最も重要な時期である。此際日本建国の中正なる思想を以て国民精神の作興を測るの要あり。各講習生は此講習により中正なる思想を養はれ、思想的源泉となつて衆を率ゐん事を望む」と云ふ様な事であつた。

後に直に綿貫哲雄氏の講義に入つた。氏は低声なるも質問応答的に話を続け、思想の相違は環境により年令により生活により位置により富によりて異なるより起る点より年令によりて異なる点に付て説明せり。昼食の閑を見て産業組合学校県移管の陳情を松下、岡村、予と原と共に県官列席の上なしたり。知事午後上郷西尾より組合に来る由を聞きて、組合に帰り待つ。知事来り、組合の状況を一応説明の上、木下房吉が二十年來勤続し居る事を知事に召〔紹〕介し、江塚の畜産と養蚕との経営法を知事が聞き取り手帳に記したり。知事退出後、江塚、田中、吉川理事と他の理事視察旅行の件相談す。龍門寺を訪問し陽松軒病氣見舞に付話す。

知事及綿貫氏に思想史を贈る。

二月十九日 木曜

朝九時、聯合事務所の文部省講習会に出席した。講習は十時から始まつた。例の綿貫哲雄氏の講演「国体に関する疑惑」に付て、左傾青年が万一日本の国体が決して万世に卓越せるものでない、万世一系が護り得るものでないと云ふ事を理論的に攻撃して来たらは如何にすべきか、等の質問があつた。併し、多くの講習に於て一問一答は失敗に終り、吉野・今村等が二三の応答はしたが、予は国体に対する議論は理論を以てすべきものにあらず、国民的信仰であると答へた。併し理論闘争に於ては理論的に説明するけれども、如何に綿貫氏が説明するかを問はんとするものであつた。近代の理論闘争に於ては此理論を明にするの要があつた。けれども、未だ予が取つて以て自説とする程の説明は見当らなかつた。故に国民的信念にあると答へて置いた。

銀行も組合も休んで之れに没頭した。国家があつて後、銀行あり組合あるのである。今日日本の現状のタガの緩んだ時には銀行も組合も眼中にはない。一路国家救済に当るより自分の使命はないと信じたから休んだのだ。綿貫氏も要点は講せずして、英のバシヨットの憲法論を述べて、彼の保守的の民主的の天皇をして虚器□擁せしむる英国流の先生だと云ふ事を感じしめたのみであつた。

予記 綿貫氏の其の坂本龍馬の父か龍馬に送つた手紙に、一、忠孝を重んべし、一、金銭は素に費すべからず、一、色の為に国を忘る勿れ、等の事、吉田稔麿氏の伯父に送つた手紙等、千葉の百姓の話等は面白い材料であつたが、昔の人が義理が堅かつた其原因は何であつたかと云ふ点は説明がなかつた。

吉野と蕉梧堂なる綿貫を訪問して其時中谷校長も居合して、予は子供に余り多くの荷を負せざる事、盗の多い事、人格教育を主とせられ

たと希望した。

咳と痰が出た。午後頭痛もした。少々軽くなつた様だ。

【語句の説明】バシヨット：ウォルター・バジヨット、イギリス憲政論などで著名な評論家、思想家

二月二十日 金曜 [記事なし]

二月二十一日 土曜

山本へ一泊し、朝十時出発し、中村支店へ一寸立寄り、午前十一時出勤す。既に頭取出勤し居り、責任上面白からざる心地せり。併も、予にとりては銀行業は適切なるものと云ふを得ず。致し方なきと衣食の為に銀行出勤するのみ。代田弁護士来行し、片桐事件に付き、法律的研究を怠らず、金田才判所予審廷等につき、種々の消息を得来りたるも、本業の方には此問題からみ居る間は解決出来ず。

聯合事務所に於ては文部省講習の為、高橋氏来講し居り、一度聯合事務に出頭すべきを要しつゝ、も出勤時間遅れた故、如何ともすること出来ず。頭取の手前早引も出来ず。

午後三時半、聯合事務に行き、文部省講師高橋慶応大学教授に終講後面会せり。菅沢社会課長も亦来り。講習会に参列す。高橋氏は学究者にして西洋経済学説を引出して之を批判し、終始学者の立場を不変人なり。文部省の講習之にて終り、北山中学校長代表して講師に謝辞を呈したり。

予記 夜、六三、安田、伊那、松沢、大滝、田中の三人を招きて、片桐事件につき仲裁を頼み、信産と百十七との間の交渉が遅々として進まずとせば。

【語句の説明】文部省講師高橋慶應大学教授：高橋誠一郎、慶應大学経済学部教授。戦後、第一次吉田茂内閣で文部大臣。著書に『経済学史』（日本評論社、一九二九年）、『浮世絵二百五十年』（中央公論社、一九三八年）などがあつた

二月二十二日 日曜

終日雪降り、既積の雪の上に猶五寸計り積りたり。朝、組合へ出勤せんと志せし処、塩沢治雄来訪して返礼に來り。農会技術員としての話もありたり。序に子息の誕生祝の招きに來れり。

午前十一時組合支所に行く。曾て相談せし如く多条繰糸機購入に関しては役員横浜出張後、改めて役員会を開くべき筈の処、専務が恣に本日役員会を開きたる筈に付、不満もありたれども、強いて不満を押しつゝ、みて居たり。

松尾青年訓練所生徒百名計り校長及塩沢治雄等に引率せられ組合見学に來組し、予は産業組合とは如何なるものか等につき、道徳と経済との調和に付出來たるものにして共存共栄を其主義とせるものなる事を述べ、猶且松尾産業組合の現事業付説明を加へたり。

午後三時半より役員会を開き、最近横浜出張の報告及視察旅行につき話したり。明廿三日午後出発することす。猶、増沢式多条繰糸機六十台購入の事後承諾を得。支所敷地買入等につきて執行役員一任とせり。終つて七面鳥試食会を開き、役員一同と夕食を共にしたり。本日の役員会に於て予の口数多かりしが面白からざりし。事業は決断を以てせざれば能はず。

二月二十三日 月曜

雪ある上に雪降り、積雪尺余あり。銀行出勤して事務を見て後組合用にて横浜行を断りて出て、松沢数一、安藤兼太郎と共に、木下齋が朝鮮より数年振りにて帰省したるに会い、仙安にて夕食をとる。木下齋は目下朝鮮忠清南道にあり。信用組合聯合会の理事を勤め居る話より、彼が一流の自慢話あり。面白かりしも、横浜へ組合役員六名を連れて行く要あり。辞して帰り、八幡より役員六名即ち、一瀬牛太郎、齋藤定四郎、吉川順次郎、石原茂一、金井政一、佐々木善助の六名をつれて八時十四分八幡を發す。

二月二十四日 火曜

一行七名、朝七時横浜カドヤ旅館に着。朝湯に入り、旅装を其儘として朝食後午前九時生糸検査所を見学し、平林技師に面会して「生糸検査所検査と多条繰糸による繰糸との関係」を説明を乞ひて出づ。神栄を訪問し、田代支店長及小菅に面会し、生糸多条繰糸に付て意見を聴取し、次て三井物産に新居金三郎氏を訪問し、多条繰糸と糸条斑に付て意見を聴取し、又吉田部長に付き、生糸貿易に付て意見を聴きて出づ。半田式多条繰糸機研究所を訪問したるが、幹部不在、西川製糸召〔紹〕介を得ず。湧川に立寄りて帰宿し、カドヤ旅舎に帰る。自動車にて三溪園を見物す。原富太郎氏の豪奢なる、而も国風を忘れざる落付ある庭園は何となく彼の紳士としての人格を現せり。一行七名多条繰糸の一日も早く備付の要ある事、工場統（一）の要等につき、所感ありたるもの、如し。

【語句の説明】原富太郎：明治昭和時代前期の実業家（一八六八—一九三九）。横浜に三溪園をつくつて古建築の建物を移築し、収集美術品を展示した。茶人としても知られる

二月二十五日 水曜

午前九時、かどや旅館を出て川崎より立川に向ふた。立川の西川製糸を訪問して金井を通して半田式繰糸機を見んと志したからであつた。川崎立川間の鉄道は始めて乗つた。武蔵平野の春の日和は暖であつた。麦畑や桃其他果樹の村の間を電車は縫ふて走つた。立川に着して駅前料亭に一行は待せて置いて、金井と二人で西川製糸場を訪問した。

西川伊左衛門、儀一、勘太郎等代る、出て話し、早速參觀を承知せなかつた。それは特許侵害や、保操保全やの問題かあるのと契約に參觀せしめないと云ふ条項のある等であつたと云ふ。遂にそんな事には責任を負ふて御迷惑はかけんことをコン、話して、遂に八王寺工場を見せて貰ふ事として儀一氏案内にて八王寺工場に行き、一覽した。

新しい工場で、生糸は九三、四点を出して居た。始めて半田式の繰糸機を見た。未だ始めて僅に一ヶ月を経た位のもので、工女も不慣であるが、よい糸はとれる事、能率は手繰に及ばないこと、衛生によい事等を聞くことが出来た。浅川御陵へ参拝して東京へ引上げた。午後六時半、新宿へ途中下車して夕食をとり、駿台荘に入った。下階の六畳部屋に七名を入れ、不平があつた。

二月二十六日 木曜

駿台荘の一夜は明けた。此旅館の内部は乱脈である様に思はれた。最下部の部屋に六人泊つた。市瀬繁及山本分会の太田・林等の諸君が居合せた。

一行の組合役員連中は他を見物するよりも議会を見物せんと主張し、吉川順次郎の如きは傍聴券の斡旋迄も予に命ずるが如く注文したので、

予も稍ムツとして居た。白梅園止宿の助川啓次郎氏と名川氏によつて白傍聴券二枚を得て午前十時頃行つて、漸く抽籤の結果、石原と市瀬と二人入場する事が出来た。他に百瀬渡や宮沢胤男・宮沢裕に召〔紹〕介状を出したが得られなかつた。

役員一行は議会へ置いて、予は名川氏を訪問して訴状の提起を何日してくれたか、片倉紡績の除権催告の手続をしてもらふ事等を頼んだ。名川氏は亦入場券を用意してくれたと云ふた。又中込氏から証明書〔盗難〕の要ありとて、証明書を書いて置いて来た。其間に三越や白木屋を見物して帰つた。駿台荘では加納平四郎と二人で夕食をとつた。

役員一行は二人のみ入場し得て、他は入場出来なかつたとの事だ。予は青山齒医者へ行く予定であつたけれども、議会傍聴のたゞりで行く事が出来なかつた。夜行で十時半、宿を出た。半宿とられたと云ふて不平があつた。

発信 和泉正実。沼田、工場召介状の礼

二月二十七日 金曜日

朝八時飯田へ着いた。組合役員一行の旅は一段落を告げ、朝飯を児島で食して散じた。銀行へ出勤した。頭取は県参事会から中沢方面へ行つた。不在であり、長く欠勤したので、事務が復奏〔輻輳〕した。村会も九時から開かれる筈であつたのが遂に欠席した。銀行には代田弁護士を招じて、銀行より盗難株券回収の訴を起すべきか否やに付相談した。遂に訴状を出して試みる事を中込弁護士とも打合せて行ふ事とした。才判所に於ても盗品は被害者へ還付すべく、被害者保護が第一の条件だと解して居るらしかつた。其事件は代田氏に頼んだ。

銀行放課後義齒前歯が二本共墮ちたので関田を訪問したが不在であ

つた。組合支所で青山専務に会ふて、横浜及八王寺、西川製糸所視察の話をして、工場統一、多条練糸機据付、二部制とする事等の三条件を骨子として明後一日役員会を開く旨を相談して一挙に此問題を解決すべく試みる事とした。午後九時過迄話して帰った。組合の三月一日より休む事、三月六日の報告会の事、裁法教師の事等打合せした。咳と啖が少し出た。何となく下腹に力がたりなかつた。

社会の今日 議会では労働法案や女参政権が出た。不通過を望む。

二月二十八日 土曜日

銀行を欠勤して村会へ行つた。数日來の旅行で稍疲労もあつたが、村会は六年度の予算の重要性もあり、出席する事とした。昨日予算会に欠席したので、余り予算の内容も分からなかつたが、第一部で歳入の審査委員となつて居たので、大体の内容を一読した。併し、村予算に付ては最も不明瞭の点が多かつた。

村予算は前年度に比して七千円の減であつたが、主に積立金の積立をしないと云ふのみで、他の大部分の費用に付ては節約は多くはなかつた。鋤柄角太郎氏の如きは此膨大な予算には到底承服出来ないと力んで居た。教育費の如きも節減はしたいけれども、教育令に定められて居るので、其教育令を改正せざる限り削減は出来ない問題で、小委員を各部から挙げたけれども、結局使丁費及費用弁償の若干を削る位のもので、六〇〇円余を削つたのみで、教育費には斧鉞は下されなかつた。教育費は最も注目的となつたけれども、如何とも出来なかつた。

予は産業組合より見た本村養蚕収入の域を数字を以て説明し、予算の編成にて村当局は骨が折れたが、其実施には一層苦難であらうと結

んだ。村会は泰山鳴動したが、四万五千の予算は通過してしまつた。校長も一生懸命働いた。終つて村県社参拝ミドリにて宴を開き、早々帰つた。

発信 関屋龍吉、礼状の礼。青山嘉一、齒の治療のしてもらえなシダ。水野常吉、文部省思想講習の礼。

三月一日 日曜

日曜日にて且又一日なれば悠々自適したしと思ひたるも、上門齒脱落したれば関田齒科医の門を叩き義齒を入れる事とせり。

終つて午後一時より本所に於て役員会を開き「工場統一問題」、「多条練糸機据付問題」等を一挙に決議し他日の争を根絶せんと志したりしも、意外に問題は逆行し役員横濱見物は却て反対となり、予て注文したる増沢式よりは野田式又はS O 式の二十条練を最もよしとするの意見多く、増沢を破談しても二十条を据付くべしとの議盛に起り、専務もアキレテ打伏すに至り、予は独り増沢式を固執したるも衆議は二十条を執りて譲らず、遂に多条練据付は違論なきも二十条をよしとす。猶一層研究の上、若し増沢を破約し得れば他の多条二十条練を備付ける事としたり。

工場統一に付ては、議論としては統一は皆賛成するも第一、第二何れをとるか疑問とすることとなり、佐々木、一瀬、熊谷は承服せず、斎藤も亦其一人なり。依て決議する迄に至らずして他日に譲り、総代会に問ふ事とせり。若し総代会に於て何れをとるかを決せばそれに従はんと云ふ事となりたり。

予記 此役員会は原、浜見等の後なれば工場統一、多条練糸採用の如きは一瀉千里予の希望通りに行くかと思ひしに、之に反し意外なりし。

復信 関屋竜吉、文部省講習の礼。水野常吉、同上。

【語句の説明】①原：原富太郎造営の三溪園のこと

②浜見：横浜見物

三月二日 月曜

凍豆腐製造が休業となつて寒気が愈々烈しくなつた皮肉が天にある。今朝の寒気は正にそれだ。極寒中の寒気の様にも沼も凍つた。朝、組合支所に昨日の多条線糸機据付、工場統一を実現せんとせば、倒〔到〕底衆議のみを省みて居れば仕事は出来ない、自ら率先して仕事をして後、若し之れか衆に容れられなかつた時は腹をか、へて断行するのみ、と決心し克つ専務の意見を問はんと支所に専務の出勤を俟つ。専務来組し予の決意を示せしに、専務は老獪に予の論鋒を脱し今後衆議一決方法は案外容易なるべし、と其の輿論を喚起せんとする方に付て先づ班長会を開き、次に各部落会を開き、次に製糸部委員及総代会を開きて大体の意見を定めて組合の事を決せんと申出で、之に賛して其の方法を論じたり。江塚も来りて相談相手となる。

次で、銀行に出勤し伊那委託より来行せる幹部に面接し、借金申込を断り業後、金田、原田と片桐問題を解決せん為、幾干の出金をなして可なるかに付て研究し、一切を原田に一任せり。関齒科医に門齒の義歯を作らしめた。龍門寺に般若あり。京都より巡教師来り面会して入仏式臨席を乞ひたり。

予記 丸山寄保に、工区八島蛇籠地元請負工事、請負書を提出せしむ。

三月三日 火曜

結氷あり。かなり寒気強し。朝、丸岡屋来訪し工区提出の書類の捺

印をなす可く持参し、組合役員の視察旅行に付て話す。父、宮津行未た帰宅せず、捺印出来ずして書類止め置く。

組合支所へ行く途中、集会所の敷地跡を見る。秋葉塔を移転中なり。旧集会所は破壊し去たり。支所にて江塚、青山、木下、富井の理事等と相談す。併して多条線糸機据付を支所に於てなし、二部制を布きて工場統一の実行をなすべく決心して青山と打合たり。併〔ど〕も青山は衆議を重んじたるもの、如し。井深も江塚、青山と共に横浜へ同伴せしむる事とせり。

正午出行すれば中島三郎来行し居り、林春治の家政整理に付信産より借金ある等の話も聞きたり。暫く面語せざりし故、昼食を共にせんとして仙安に行。竹村要人、後藤の問題にて訴訟となり示談の為之をまげて屈辱的金田が示談をなすを見る。

仙安へ電話あり、村田屋婆病気危篤なり、来れとあり。依て直に中島と分れて村田屋へ行きしに、西村田屋の静婆肺炎危篤にて親類旧故来訪し居り、大騒せり。予も亦之を見舞たるも既に危険状態なり。父、足柄より午後帰て増恵飯田へ買物に行き、村田屋も訪問して帰る。多忙なりし日なり。

三月四日 水曜

専務理事不在なれば支所に行きて万端の指図をなして後上飯す。

常に遅刻しては出勤す、併も銀行よりは組合の方面白し。

午前九時本所行。時に工女等方法を久保田某を頼みて教授せしむる為其開始式ありたれば、行きて挨拶をなし、方法講習を本所に於て行はしむ。希望者七十名あり、盛会なり。

一巡して後上飯銀行出勤す。

三月五日 木曜

銀行へ出勤する前支所に到り、一瀬、金井両理事と相談して明日の懇談惣会の献立を作り、酒の見本を集め等して午後三時迄本所。それより上飯し銀行へ出勤す。

銀行も予〔預〕金漸減と片桐事件の為、最も悪闘せらるべからざる立場にあり、大に頭を苦悩す。金田支配人は二十万円の金を重役にて造られたしと申込ありたるも空気如何とも致し難く、徒に他の銀行の公債の多き、頭取に資産家を有する点に付き、うらむのみ。金田は銀行の大立物たり。

電話にて吉川理事より注進あり。清水、毛賀、代田等散々に明日の懇談会に当り組合理事の工場統一問題より進んで多条繰糸機設置、増沢との関係に付て喫〔詰〕問し、役員をしてダンガイせんと呼し寄せんと寄りより協議し居れりとか、又は市瀬牛太郎は毛賀辺に呼はれ被告扱をせられ逃げ帰れりとか、種々話あり。何とかして明日の会合をして加元〔減〕よくせしめんものと考え、不得要領に終らしめんとす。

三月六日 金曜

銀行を欠勤して組合懇談総会に出席す。之より先、毛賀、清水、代田等の部落にては、工場を支所に統一せらる、を患ひ各部落に会合して其の阻止運動を試み、此総会に当りて組合長を難詰してあやまらしめんと計画し質問者を決して勢揃をして乗込みり。

午後二時会開を宣し、予定の行事を終り、懇談に移りしに、近藤良太郎、清水、佐々木某、林賀一、塩沢誠一、木下仙次郎、熊谷元茂、福島文之助等より質問続出したるも、柳に風とうけ流し、あまやらし

めんとせしに尾の捕へらる処なし。中にはこんな瓢箪鯨の役員と無責任の総代には此の組合を任せては置けん等云ふものあり（小木曾重）たるも、予は組合員と不況対策として一文も多く配分の行く様研究の結果かくなしたるなりと答へ、統一問題にはふれず、**が何と弁するも組合長はへぼいとの事に対しても、何とかして組合長をあやまらしめんとするのかなあとうそぶく。他の理事に鋒を向け、試験的に六七台を据付けんと総代会にて専務は確に明言したり、此間に組合長はそんなことは言はん、然らば惣代悪しきか理事悪しきか、と責任を問はん等言ふものありたるも、責任叫ばんは他日に任せん、記念日の御祭にけんかは止められたし、として要領を得しめず、遂に懇談を打切り酒宴となり。予は凱旋將軍の如く男振を上げたり。竹村順一、龍門寺等来臨す。

中には、牧野や竜丘の岡村より、内の組合長はよいと云ふものあり。社会の今日 大衆新聞には特筆大書、松尾組合の大談判。信毎発表等にも出づ。警鐘乱打ち一挙組合へ押寄せ組長を難詰す。

三月七日 土曜

組合支所に立寄りて昨日懇談総会の後始末を命じて後上飯す。

上柳葬儀の日なれば会葬せんとせんに大平先にすべし、との事に午後一時出向す。父よりは生花一对及香資五円を贈る。賑かなる葬式にて、上柳伯父の旧弊の堅固なる余に苦々し。楮上に酒を置きたるも、飲酒するもの僅なり。予定よりは会葬者多く生花、花輪、造花七八対あり。埋葬後、増恵、敏と共に促して自動車にて帰る。〔中略〕。

午後、銀行の問題に付頭をなやます。預金漸減し貸付回収不能なる、片桐問題の為悩みが続く。進まんが危く、退かんが義理に違ふ。

九日夜行東上し片桐に会ふ事、及名川氏に面会し一万二千の保証金を納入する事に決せり。

三月八日 日曜

組合支所に出勤してくれ、田中句〔荀〕一郎が用事があるからとの事に、支所に午前九時出勤す。面会したるに、明の昨夜集会の模様を語り、今後組合幹部の多条線系機設置統一問題等につき態度を決する件につき話あり。増沢商社員来訪して、新聞記事を見て驚き来訪し、其真想を尋ねられたれば、新聞記事の如きは針小棒大なる事なりと、未だ設置場所に付ては問題あれども多条線系機に就ては設置に関し異存なしと告げ返す。

午後一時より斑長会を開き慰勞の為一献を呈すと挨拶し、優良斑褒彰及団体解除奨励に関し説明す。併して統一問題及多条線系設置問題にはふれず、無事と氣霽々裡に終了し、尚も酔ひて従業員と共に踊る。石原に予が今後の対策に付て語る。予か対策は次の如し。石原了とす。今後は以上問題を役員側より進めざる事、不日総代会を開きて位置問題を決せしめる事（設置時日、場所等を）。

予記 終つて龍門寺を訪ひて十日の法要に付き頼みて帰る。父、両上柳七日法事と頼まれ行く。敏子帰宅。

三月九日 月曜

組合に専務江塚と話し合ひて午前十一時出勤す。組合の方も工場統一問題にからみて種々の問題簇生し、銀行の方も金融界恐慌の時代に入りて預金漸減し危機近つきつ、ありて、両者共に難関に遭遇し智を張るに所なし。

重役会を開きて片桐事件を報告し、又營業の趨勢を話して重役の考慮を促す事としたり。予は重役会に臨みて片桐事件の責任上如何なる成敗をうくるとも致方なしと陳謝の意を述べたり。重役連中も意外の營業狀況に驚きたるもの、如くなりしか、先づ一考する事として、別に名案も出てずして別れたり。

後仙安に於て夕食ありたるも、上京の時間迫りたれば辞して上京の途に着く。途中宮田に下車して千章を訪問し、彼の病を尋ね、三十分にして又辞して上京す。和泉社羊羹一用土産として贈る。汽車中、水電業者らしき事業家風の男五六名乗込みたるを見る。

三月十日 火曜

朝七時駿台荘へ着す。併も満員なりとて最下層の一室に案内せられたり。

朝九時外出す、名川弁護士を訪問して押集〔収〕株式の仮処分に関する手続をなし、保証金壹万四千七百五十円を公債として渡したり。仍て預証をもらひ、名川条雄氏に依頼して帰る。

銀座通りより松屋等を見物して伊那電に伊原専務を訪問して百十七銀行重役会の模様と預金漸減の条況とを報告し、猶最後の場合ともならば各重役に貸付けたる金を返済を求め、それにて支払をなすより外致方なからんと、予の意見を述べたり。依て三時間計り会談して、伊那電株は何とか担保にして金策を講ずべしと話して辞し、丸ビルに入りて昆布茶二罐を買ひ、頭取及金田両氏に贈る。

駿台荘に帰りに夕食を喫し岡島、片桐両人に面会したるに、彼等が⑥企等の仲買人に付き歎願したるに其の要を得ず、ひたすら歎願のみしたるが、⑥は親類、銀行、仲買の三者にて損を負担する旨を説き、

二万円ならば示談に應ずべしと云ひ、企は五千円ならばとの事にて話
つまず、此の如くならば今一応^⑥へは一万二千を以て交渉する事とし
て分れたり。其夜再び夜行にて帰行の途に付く。平沢万太郎の遺骨と
共に同列車なり。

三月十一日 水曜

朝長野へ着すれば平沢万太郎の遺骨及上伊那地方の人の遺骨との間
に入りて葬式列車の如し。夜行疲労したれども直に銀行に入りて事務
を見る。事務復奏して多忙なり。経済情報社の記者入行し来りて、報
告書を見つ、其の所感を述べ立て、最後に雑誌代及経済投資週報代を
強請せられたれども、之に拾円を与へて帰らしむ。予之に直接面接せ
り。此男は稍経済報を有し法螺をふきて銀行会社等をゆすり屋を以て
職とするもの、如し。新聞及雑誌其他読書の時間少く、気のみ急ぎて
良案も浮ばず、うやむやに行務は過ぎ行くなり。

午後二時より本所に産組役員会あり出席す。総会懇談会以来、組合
合併工場統一に付き、人心不穩の定あり。役員会に対策をかけしが、
増沢を断るとせば手金三千円は如何にすべきに付き研究の結果、井
深を増沢に使せしむる事として第一戦を見る事とせり。夜に入る迄話
して青山に、今後は役員として消極的態度に出て組合員諸氏の力によ
りて器械をとり付けるや否や統一するや否やを決するものなり、故に
之より以上役員としては進取的態度をとらぬ様忠告したり。多忙なる
一日なりし。

三月十二日 木曜

雪消え春霞欄引き互る日和となる。午前中大雄寺を訪問し、山門の

修理工事を検す。山門は祖先が寄進したるものにて其の修繕付なれば、
父の代となりて前後三回修繕工事を行ふ。今回は屋根雨洩の結果棟木
朽ちて之をとりかふ大修繕をなす。其の工事費凡金貳百五十円を要す。
良孝和尚と和尚が独力を以て建設する鐘樓の設計図を見る。時に大元
居士来山し居り、共に良忠和尚の病室を見舞ふ。山門修繕の話をして
帰る。

頭取長野県財制調査委員として出長したれば、其の不在中県債を若
干取入方を申送る。日本銀行松本支店員伊藤齊来訪したれば其の案内
をして信産銀行に至り後、蕉梧堂へ止宿したれば、岡野銀行の連中蕉
梧堂を訪問して共に夕食を喫し種々談話をなせり。

午後九時帰宅す。三原屋にて女兒分娩せる由を聞く。産組の繰糸器
械、増沢破約の件に付ては井深を使者として送りたり。彼如何なる状
報を齎すやを待ちわびたり。仕事を早くなすは予の希望なるも、其の
話の落着なきは軽々しと云はる、以所なり。

予記 煙草は稍習慣付きたる感あり。灸は毎朝すへたり。

三月十三日 金曜

銀行へ出勤。大平頭取県会議員として経済委員にて出長す。不在に
付朝より出勤せり。預金の減少と貸金回収の不能等の状況より、栃木、
福島、山梨、富山県地方銀行の預金払出休止の状況を察し、信産銀行
の北信地方に於ける窮状を思ひて、若し我行に此の状況の迫り来る恐
もあれは警戒すべく出勤したり。

未曾有の地方銀行不信用の時代来り、開店休業は到る処に出現する
に至りたり。然も県にては信濃銀行の影響、信用組合及各役場等に及
び、救済の策として県債300万円を起し、信聯に貸付て利子を補給し、

万一回収不能の時は之を三十万円を限度として補償する案を立て、之を県会に提案し委員会は通過するを得たり。此件につきて南信新聞より意見を問はれて、此の如き事は金融統制上より官吏が県債を起して救済するが如きは原則として不可なるも、県下金融を恐慌より救ふには時局として止むを得ざる処なるべしと答へたり。財界不況に際しては、先づ万一の際として重役が銀行より借入たる金を他に転じて一時現金にて返済してもらふ事、然る時は三十万円を得べし、との案を立つ。

予記 吉川芳太郎より電話にて片桐事件余りに当方より急くはよろしからず、との注意をうけたり。所得申告書に付き其実情を申告する事とせり。財界落付たるが如く云ふものもあるも然らずと思はる。

発信 木下斉願翰。

社会の今日 浜口首相病氣全快に不至政局不安気分みなぎる。

三月十四日 土曜

支所に行く。専務病中にて欠勤し居り、井深より増沢と交渉の結果につき報告を聞く。増沢の方は何とか解決付くもの、如し。それより上飯す。

銀行にては店頭最も閑散なり。頭取、県財政調査会出席不在、日銀松本支店へも立寄りて来る筈。銀行組合共に危機に瀕し居りて憂慮に堪へざるも而も平然として号令せり。

午後六時帰宅して、尚夫上京し、信也の所へ行くべく仕度せしめたり。喜代も亦同行すとして来訪し、始朝五時十四分八幡発にて上京の手段なる。種々の問題雑然として興り苦慮するも致方なし。

組合の方は大体方針として此上は役員側より進まずして組合員の下

解によりて進む事に決心したり。専務にも其の状は話し、将来をいましめ置き。今村五六、勸業債券にて十円計り銀行にて貸せと云ひ来りたれば、組合にて何とか融通してやるからと述べて帰す。

三月十五日 日曜

組合本所及支所行。専務と事務打合をなし、組合として製糸事業は単に売上金を配分すれば済む仕事にて簡単なるも、信用部の仕事は最も重大なる仕事にて、殊に五十万円の貸金は預金四十八万円に對して余りに多額なれば、此点を充分注意して預金の三分二の額迄切下げることとを大方針とすべし、と説明して青山に其旨をさづく。尚準備金等も公債等を買入れ事業資金として使用せざる事に話せり。尚伊那社問題につきても打合せたり。此事は十六日石原、吉川両氏にも話せり。

三月十六日 月曜

銀行へ朝より出勤す。吉川鎮司医の母の会葬せざりしにより之を弔問す。金壺円香典を持ち行きたり。安藤兼太郎の店の前を過ぎ立寄りて種々話をなし、製平麦機の話等をなす。銀行に帰りて午前中行務を見て後、平沢万太郎の村、組合葬に会葬す。途中組合関係の者に会す。葬儀終りて虎四郎宅を訪問し一時間計り世間話をなす。石鹼半打贈る。葬儀後、市田喜楽に組合関係の者集り一献を喫しつ、操業短縮を来る廿五日にて打切る旨の相談をなす。

衆議決して明日伊那社の会合の時に之を決し竜水社とも打合すべき旨を告げたり。平沢の会葬をなしたる日本生糸会社買入主任稲田氏来郡したれば、之れが歓迎会を仙寿楼に於て開く事と決し、最寄十二三

組合之に参加して開宴す。午後十一時帰宅す。稲田氏には初めて面接す。湧川同伴せり。銀行の仕事と組合の仕事と重複せり。

春色山野に満つ。

三月十七日 火曜

春色たゞよい氣候暖気数日来加る。組合支所に行く時に吉川、石原両氏有り、本組合の貸附金の固定せる預金に比し、貸附金の五十一万に増加せる点等を話し此の如き放漫なる組合にては将来不景氣続く時は或は利子も支払不能に陥り、遂に破産の憂き目に会ふかも知るべからず。之を思ひ彼を思へば痛心一方ならずと話す。併して両氏の一考を煩はせしに、彼等も貸付を制限し回収を計る事に全力を尽すより外なしと決す。

併して伊那社役員会に出席す。伊那社危急存亡の時に当り、協議の結果、生糸共同販売は第二とし、聯合会として原料統一、製糸指導、及調査の三項目を主として行ふ事、及其維持費負担方法に關して熟議を遂げたり。此問題は既に昨年予が提唱に係るものとして今日時期至り、伊那社を単なる聯合会の合同會議として以上の三項目につき事業をなすとせば将来可なる以所を明にせり。種々の計画起草委員として予も選ばれたり。廿一日午後会合する事となれり。後、午後二時銀行出勤し大平頭取と打合を行ふ。

発信 伊藤齊、返事。

受信 伊藤齊、飯田ノ礼。北原源三郎、嫁出来たる報。

三月十八日 水曜

組合へ日本生糸の稲田氏來訪すると云ふので朝より行きしに、増沢

店員降旗來訪し懸案となり居る手金（増沢多条繰糸機六十台）三千元取戻事件につき交渉す。増沢の申込は新聞に「多条繰糸機中最も劣悪なるものが増沢式なり」との記事大衆新聞に出てたれば、此事に付て信用上大に困るから此点が何とか解決出来れば他は無条件にて三千元返却すべしとのことに、新聞記事に付ては責任は負ふ事能はず。併し将来徳義的に堆奨し考慮すべしと述べて井深を岡谷へ同行せしめ解決の任に當らしむ。稲田氏來らず。

午後三時半漸く銀行へ出勤して金田より行員が予の机の抽出を捜見したる（行員移〔異〕動に付）由を聞きて驚く。行員と云ふものは油断のならぬものなりとの感を深くせり。仙寿樓に南信新聞重役会あり出席す。平野、野原、林、松下、大原出席し、南信新聞の主義綱領を發表して其の意見に合するもの（記者）を雇ふべき旨を決定することとして散す。吉野來行して猶興社につき相談せり。中谷氏を召きて四月四日午後一時より猶興社總會を開く筈に定めたり。予記 青山に貸付を減し預金の増を計るべしと告げ、伊那社問題平麦機等につきて話す。

発信 中谷武世、四月四日猶興社大会に出席を乞ふ。

三月十九日 木曜

銀行へ出勤す。終日行務を見る。聯合事務所に北原産組主事を訪問し、松尾の組合の条〔情〕況を話し大衆新聞が論ずるが如き記事は村内に於て為にするものが書くものにして、敢て真相を得たるものにあらずと弁じたり。尚、中原にも会いて猶興社に總會を四月十二、三日頃開きて中谷氏を召きて勢揃ひをなす事を打合せたり。

銀行に帰つて午後六時迄執務せり。放課後、課長會議を開きて事務

につき打合を行ひ、予は電話使用に関する件、金庫内各係整備に関する件等を打合を行ふ。信也、尚夫、東京より帰宅す。午前中帰りたる由聞く。組合と銀行と両者共に重大なる危機に際会し、苦痛事多く心勞甚し。

三月二十日 金曜

組合支所に行きて井深より増沢交渉の報告をうく。増沢総大将花吉氏に面会したるに強硬にて、何時にても解約は出来るも、万一解約の時は従来の取引に鑑み多条練糸機手金三千円は何時にても渡すべし。然し、増沢式多条機か劣等なりとて他の多条機を据付たる時は何時にても解約すべしと、然らば将来増沢製の二十条練を据付たる時は半價にて据付けくれる様話して帰りたり。要するに、此手金三千円は早速返還は六ヶ敷事に決し、青山と話して午後四時より本所に急遽役員会を開く事としたり。

尚午後一時より村会あり。農山漁村低利資金九万五千三百円を新に借入れる事となりたれば、其の決議なすべく開会したるに、竹村、福島、青島等議論百出し午後七時迄か、りて漸く無条件決定し、それより組合役員会に臨む。役員会にては此役員会にて決したる事が其役員個人々人の立場によりて動かか如き事あらば執行役員としては事務を執行する事出来ざるを以て充分注意を望む旨を告げ、尚増沢と交渉の纏末を報告し、到底増沢は手金返還駄目なるを以て役員の状態を決せられたしと望み、尚来るべき総代会に對する対策を講究せり。

予記 此役員会は深更迄か、り役員会の足并を揃へるべく熟議をとげたり。頭痛し悪寒を覚ゆ。村会と云ひ役員会と云ひ、共に議論百出したり。予は村經濟の将来を論じ百万円の負債を如何にして返済するか

を論じ将来の対策を講究せり。

発信 中谷武世、十二、十三日来峽をたのむ。

受信 水野常吉。

三月二十一日 土曜

三十七度二三分熱発し、終日蟄居して静養す。子供、下女と共に座光寺に參詣したり。父、大雄寺山門修理見分の為上飯したり。

終日家居せる事は病氣の時より外になく、暫くぶりたり。

三月二十二日 日曜

外套は暖過ぎて脱したくなる。朝十時十四分八幡発にて組合用にて出県する事になり出発す。昨日来稍頭痛と発熱あれば心配たるも異状なし。組合支所にて江塚に会いしに江塚は強硬論者にて、清水、毛賀代田の三耕地位は除外しても此統一問題は解決せられたしとの案を持ちたり。十時十四分発清泉地行訪問して、家政整理に關して街道裏売地と大島銀行負債整理の件、山林菅沼恵吉に売却の件、大島銀行株券譲渡の件等父より命せらるゝまゝ、に話を進め、且又和合恒夫の開設したる瑞穂精金の話と原平が市内農事試験所より止めたる後、無為徒食し居るが如為に何とか救済する件につき打合を行ひ、午前十一時半より午後五時に及ぶ。

午後五時之上り電車に投して長野行車中太平、平田両県議と同伴す。辰野にて芝原校長と会し同車して塩尻を過ぐれば、菱平農家青年訓練所石川氏乗込み、幸同講習所の話と原平問題、芝原氏と予との間に起りたれば、石川氏に其の話をなし種々打合して長野に向ふ。

予記 長野着午後十時芝原氏と共に犀北館に投宿す。

三月二十三日 月曜

朝、犀北館に起き、芝原氏と同宿す。吉川亮夫の室に訪問し来県の要談をなし、工場課へ出頭して製糸工場二部制執行につき許可せらる、や否やを探索すべく来意を語り、且又懸案となり居る多条繰糸機設置及工場統一問題に付打合せたり。

午前九時県庁出頭、先づ産業組合課につき杉原課長と面会し来意を告げたるに、別に支障なしとの意を洩らされ、奥原主事に産業組合製糸と多条繰糸につき意見を述べ、次に工場課に行次席に面会して来意を告げ二部制をなすとせば許可せらる、や否やを問ひしに、可然との答に然らば意を得たりとて辞して社会課に到り、青野少佐に面会し、吉野、今村両氏が下水内に到たる時の様子を話し、其他下伊那に於ける思想状況の話をなし、尚関主事に面会し作興会と青年訓練所指導員に付話したり。

善光寺を参詣したる後数にて大平、吉川、増川三氏と会食して県議案と其の分配関係につき聴取したり。午後二時半長野発にて芝原氏と共に帰途に付、社会課石川氏より農事青年講習所案内を得たり。産組課にては稍堅くなりたり。工場課に於てはよく委細を悉して話し得たり。県会にては三百万円の起債をなし内二百万円は信聯百万円はBに融通すと云ふ。原案過少なり。

予記 村田屋忌明あり南銀行。

三月二十四日 火曜

朝、父と家事上の事に付て打合せた。北裡モヤ垣を杉の丸太で作る計画もした。併し材料代だけでも二百円位か、るので却て今の儘とし

て修理すべきを主張した。北裡の石垣か数年前からウンデ居たが壊れたので宮下を呼んで修理せしむべく上飯の序に宮下の家を訪問した。組合支所にて江塚、青山と打合せして、(一) 県の二部制採用に關しては異論なき事、(二) 農山村漁村低資の使途に關する事、利子引下、新規貸出禁止、(三) 多条繰糸機取付問題等に関して打合せ、又来る廿五日繰糸を開始すべき件は伊那社役員会にて決すべき事として伊那社役員会に出席す。

伊那社役員会は更生伊那社の廿一日委員会開かれたるにより其原案に付研究し、予算案につき打合せ予は予算論を主張して其決果予算を作る事となる。午後二時銀行出勤す。

日に月に預金減し貸付減せず窮状迫るが如し。放課後片桐事件に關し金田と打合せをなす。銀行にては財界の恐慌に加へて片桐事件あり。組合にては工場統一多条繰糸機設置問題あり。内外共に多事、心身共に勞す。

予記 伊那社にては繰業開始問題は議案としたる事なしとの清水の言に、予は反対を唱へ彼の非を鳴したり。清雅会仙庵にあり。出席して夜九時帰。

三月二十五日 水曜

組合支所を経て上飯し銀行に出勤す。時に県会あり。大平不在なれば電話を以て行員移〔異〕動及現下の營業状況を話し、訴訟事件につき、銀行よりも私が上京し弁護士に頼む事を相談し決行する事となり、何となく上京はものうけれども他に代理せしむるものも無之、夜行にて上京する事とし、放課後金田、原田両支配人と打合を行ひたり。放課後ミドリに於て開かれたる秋山農業技術員の送別会に出席せず。

三月二十六日 木曜

朝、午前七時駿台荘に着し満員にて狭き一室に入る。直に代田弁護士と名川氏を訪問し、予に原告となりたる株主より提出したる株券返還請求訴訟の準備公判の件打合を行ひ、午前十時半東京地方裁判所に出席す。予は生れて始めて東京地方裁判所の中に入る。原告の弁護士四人、被告弁護士七名あり。準備公判を傍聴して次回は四月三十日となりて午後一時終了す。弁護士控室にては東京の弁護士多く集まれるを見たるも取調所は狭き室にて案内簡単なるものなり。

終つて代田と日比谷公園松本楼にて昼食し、再び名川氏を訪問し、関島卯三郎を再び訪ひ、被告仲買人の意中を探らしむ。代田千章盲腸炎再治療の爲上京、同じく駿台荘に來りたるを以て帰宅せんとして、日本新聞に中谷武世を訪問し、来る四月初旬來峽を依頼し新日本の出生に關して打合をなす。中谷曰く初めは伊那の人氣はすさまじかりしも、近來は古陋なる保守に陥りたるものなるべし。熊本の如きは近來愛国勤労党の旗下に參せり、等話し彼一流の伊那を旧陋なりと罵せしむるに至れり。

予記 帰宿後、木下勝男來訪して就職出來たる由を語りて、彼の努力の報ひられたるを称す。千章の憶病なるをヒヤカシ罵り等して、午後十時半夜行にて寝台車に入る。併(ど)も眠られず。社会の今日 議会々期二日延長せらる。勅令減稅案。

三月二十七日 金曜

夜行の汽車中明けて余り熟睡出來ざりしも、寝台車中より出で、辰野プラットホームに出つれば同じく和服に外套着たる長身の壮年に會

ふ。見れば吉村繁俊なり。久澗を叙して伊那電車に入りて四方八方の話を上伊那郡を通過す。故郷の老母病急にして帰省したりと云ふ。飯田南信自動車にて別る。

銀行に入る。金田、原田に不在廿六日の營業狀況を聴くに、預金減少し薄氣味悪く手許公債は全部安田に持ち運びたりと。銀行業の悲鳴時怕々當來せるを感ず。之れ一般の不況に依るものなりと雖も、亦片桐事件の爲一般に悪評をうけし故なるべし。

松沢來訪して、信聯社にて大平豁郎と連名にて三十万円聯帯の保証書を呈出す。以て信聯より資金の融通を得んと企てたるなり。頭取に上京の用件につき報告し、長野県会の模様を聴くに、県会提案の三百万円は頼むに足らざる事を聞く。徒に長野にて自行の窮迫を示せるのみ。松沢と銀行を退く時の事を頼みたり。

放課後、南信新聞重役會あり。記者減俸案一割引、及社の主義綱領を掲げて其の規範によりて記者及記事の如何を論ずる事とせり。一同夕食を喫して帰る。青山に電話を以て廿九日役員會を催す旨、及練糸は來月中止する事等の打合を行ふ。

受信 中谷。中島三郎、里河内の件。

社会の今日 議会延長二日もすむ。減稅案無事通。

三月二十八日 土曜

大雄寺山門の大修理落成したれば其の落成を祝いて大雄寺にて近隣の僧侶を集め大般若經を転讀する事となり。招かれて午前十時より出張す。父母及増恵を同伴し子供等留守居せり。秋山農業技術員任滿ちて解雇したるに付八幡駅に見送る。桜町駅迄見送りて大雄寺に入る。親戚招待客として野原、両上柳、宮沢、木下等參列し一時間計りにて

大般若終り齋座の供応をうけて後初音に招待して再び一献を招待客に献じて午後三時散す。

銀行へ立寄り、午後四時より重役会に臨む。財界の不況の為預金の引出多く貸付の回収意の如くならず、将来如此の如き事あらば銀行は全部倒れる事となるべきやも保し難く、営業の大方針を如何にすべきかに付相談せり。話六ヶ敷ければ重役全員の協議にかける事となりて終る。館林警部補の送別会鯛飯にありて出席す。終つて中原、市瀬と仙水荘及三楽等を廻りて十二時過帰宅す。

三月二十九日 日曜

組合へ出勤す。「中略」組合支所にて青山と組合の製糸部統一問題、及多条練糸機購入に付ての態度を決すべく話し合せて進む事とし、午後一時より開かるべき役員会に臨むべき態度も決して青山の意中を話し、万一の時は多条練糸機手金に付ては責任を負ひ、設置に付ては両所へ取付ける事は統一上面白からざるに付、一般組合員が自覚する迄待つ事、と肚を決したり。即ち、手金は責任を負ふ事、両工場に据付ける事はなさざる事、万一両工場に据付ける等の時は組合員の自覚ある迄待つこと、総代会に於ては報告に止め、若し質問ありて事件の進む時は委員を上げて調査研究をなす事、等の打合及繰糸短縮を此際三四日の事にて破らざる事等の打合をなし、又低利資金十万円の使用法方等を原案として打合をなし、之に臨む。

午後一時役員会あり。総代会を開くべきや否や及時価算定に付協議し尚総代会に対策を研究して夜に及ぶ。銀行は金庫内装置の為行員を集めて原田支配人指図して工事をなす。

三月三十日 月曜

銀行に出勤す。聯合分会分会長会議あり。招待をうけしも欠席す。中原へ電話を以て猶興社世話人会を来る四月二日午後三時聯合事務所を開く事に付相談し、右の旨各世話人へ端書を以て通知す。銀行は金庫内の戸柵工事未了にて大工来り、中二階の古帳簿庫中へ金庫内にありし柵を取付けしむ。「中略」電話を以て行員更迭の件を各支店長に内報す。金庫内工事を見て夕刻帰宅すれば、木下勝男来訪し居り、止めて彼に共同火災保険会社へ入社したる御喜を言ひ、種々引止めて話せり。彼熱心に就職運動をなしたる効現れて就職出来たり等話す。桑の肥料として石灰窒素を施肥せしむ。之に關しては信也をして研究せしむ。

受信 北原小石。山本父、会津より。

三月三十一日 火曜

近来心意沈滞したり。国情不伸廢類的となりたると同様、吾身も退嬰的となる心地す。組合惣代会に臨むべき原案を送る。大体は専務と打合せたれば異体同心となりて進む。

蚕糸中央会より、森田なるもの来郡し廿五日頃下伊那に於ける繰短破りを監視せしか、徒に禁を破りて後日累を遣さんより禁を守りて繰業開始するに如かずと決し、専務とも打合せて一日より開始する事とせり。組合支所にて井深にも話し、井深も器械の専門的立場より説明する事とせしむ。

午後上飯し銀行出勤す。頭取来行せず。

猶興社世話人会を聯合事務所を開く事とし、各世話人に来参通知を出す。猶興社は単なる思想団体にして政治団体にあらずと雖も、将来

は政治的に動くを要し憂国の士を以て一脈の通するものあらしめ、有事の際身を挺して国に報ゆるの士のみを打て一丸とすべく結社したるものである事を総会に於て通知するの要あり。